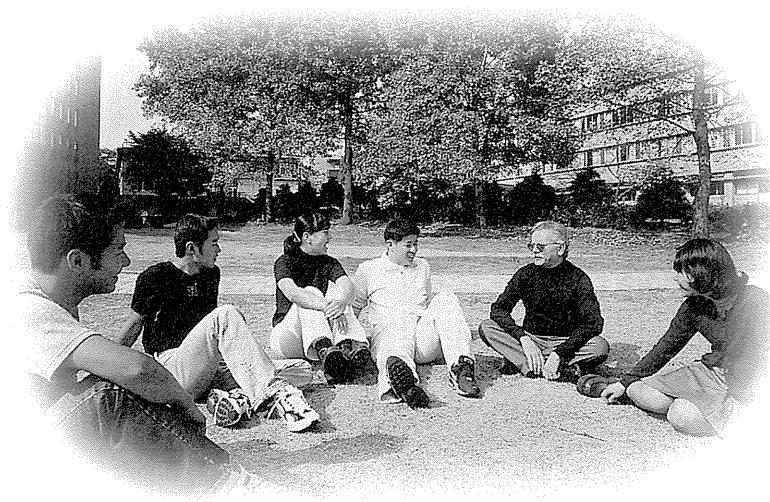


# 麗澤教育

第8号

平成14年（2002）4月

特集：「麗澤大学の専門ゼミ」



## 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

# 麗澤教育 第八号 ▽目次▽

▽フォト・アルバム①▽

麗澤大学近況

▽オピニオン▽

麗澤大学の人づくり

—国際経済学部の原点から「次の一〇年」の展開を—— 成相 修 ······

▽特集▽「麗澤大学の専門ゼミ」

ゼミナール一覧

·····

①犬飼ゼミの歩み——人と自然のあるべき関係を求めて—— 犬飼 孝夫 ······

②文学ゼミの「赤い涙」と「嬉しい涙」

·····

石村 喬 ······

▽フォト・アルバム②▽

③なんてつたって中国——現代中国を浮き彫りに——

····· 三瀧 正道 ······

④「松本ゼミ」ってどんなゼミ?

·····

——どうして戦前の日本語教育をゼミのテーマにしたのか——

····· 松本 哲洋 ······

⑤「家族と社会の比較研究」ゼミ誕生

····· 黒須 里美 ······

⑥みがきの場としての梅田ゼミ

····· 梅田 徹 ······

⑦「マクロ経済理論と政策」	成相修
⑧私のゼミ指導のねらいと課題	永井四郎
⑨佐藤ゼミの八年	佐藤政則
⑩高ゼミ紹介——自己の可能性に気づき、それを引き出す——	高巖
⑪都市システム論ゼミ——じっくりと肉薄し立体的に考察する——	高辻秀興
⑫経済学は環境を救う	小野宏哉

### △麗大の今▽

①学び成長する就職活動——麗大生に見る近況——	大貫啓行
②第三八回麗陵祭をとおして学んだこと	藤山岳士
③麗陵祭に「米百俵」を出展して	丸山康則ゼミ一同
④英語劇を通じての出会い	塩澤善弘

\*寄稿して頂いた在学生の学年は、平成一、二、三年度のものです。

### △麗澤教育の理念▽

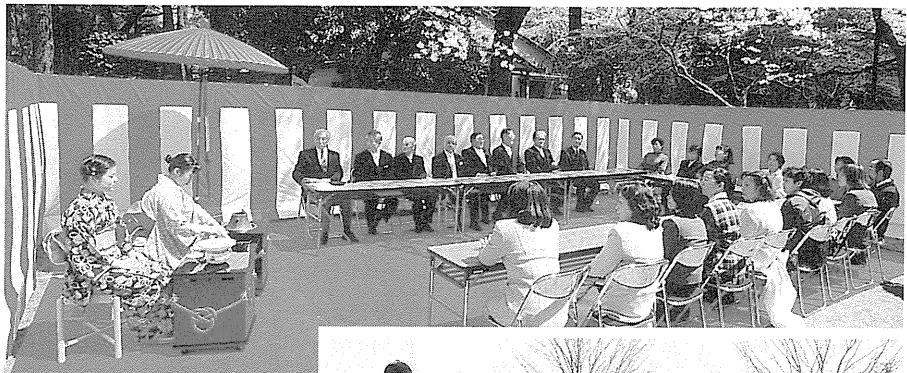
麗澤教育は、創立者廣池千九郎が提唱した道徳科学「モラロジー」に基づく知徳一体の教育を基本理念とし、学生生徒の心に仁愛の精神を培い、その上に現代科学、技術、知識を修得させ、国家、社会の発展と人類の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する。



### △麗澤教育のめざす人間像▽

- 一、大きな志をもって真理を探究し、高い品性と深い英知を備えた人物
- 一、自然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈しみ育てる心を有する人物
- 一、自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物





茶道部（裏千家）の  
野立も行われた

平成13年度入学式の  
日に（上・右）  
(2001. 4. 2)

馬も新入生を歓迎

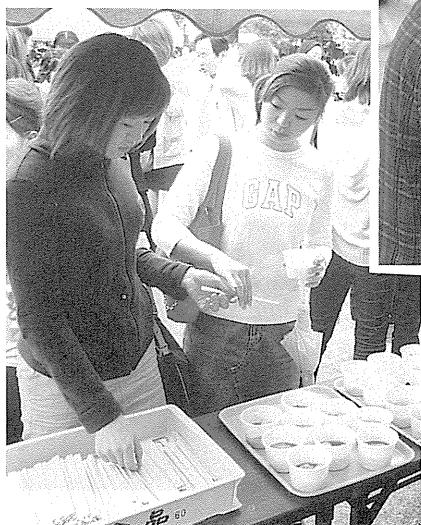


平成12年度 卒業・修了記念パーティー (2001. 3. 14)

心が通い合った  
留学生歓迎懇親会  
(2001.4.20)

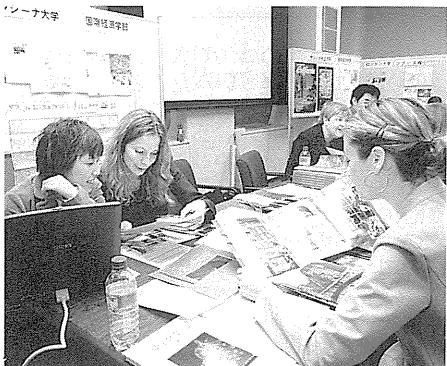


レッドランズ大学(米国)  
夏季研修団来学。  
成相国際経済学部長が  
「世界の中の日本」を  
テーマに講義した  
(2001.9.10)



「野外昼食会」で、料理に舌鼓 (2001.5.8)

コーナーに並ぶ学生たち



トルコの「チャナッカレ3月18日大学」  
の学生らが来訪。日本とトルコの文化の  
違いを学びあう麗大生と  
チャナッカレ大生  
(2001. 9. 6)

提携校の担当者も参加した「留学フェア」  
(2001. 12. 4)



台湾の南華大学雅楽団が来学。  
2000年の歴史をもつ莊嚴で勇  
壮な雅楽を公演（右・下）  
(2001. 4. 9)



# 麗澤大学の人づくり

—国際経済学部の原点から「次の一〇年」の展開を—

国際経済学部長 成相 修



平成四年に国際経済学部が発足して一〇年が経つ。しかし国際経済学部の一〇年間が日本の「失われた一〇年」と時期的にほぼ重なっていたことは、一面では皮肉であった。高い理念と倫理観、国際人として通用する人材を育成するという発足の精神に近づけるように、我々教職員が一丸となつて取り組んできた。こうした努力が実らなかつたのであろうか？

いや、決してそうではない。この一〇年間、日本の経済社会は大きな挑戦を受けた。日本という国全体としてみると、適切な対応を誤った。構造的・抜本的な改革が必要であったにもかかわらず、小手先の手段で乗り切ろうとした。公的部門も民間企業の

あり方も、大きな変革が求められていながら、喫緊の課題である「構造改革」を先送りしてきた。それがこの一〇年間の惨憺たる結果をもたらした。

私たちの学部は、こうした困難な状況に立ち向かい道を切り拓く人材の育成に努めた。グローバル化が急速に進む時代にあって、いかなる「場」で活動し、いかなる問題を思考するときも、日本国内だけの問題ととらえることができないという強い認識のもとに、地球大で思考し、地球大で行動する人材の育成を目指した。「国際経済学部」という名称も、こうした狙いがあった。語学に強く、情報処理能力に秀で、経済・経営の基礎力に裏打ちされた人材の

育成が期待された。こうした点では、まさに時代を先取りしたといえよう。そうはいっても、世の中の変化のスピードが速すぎた。世界の変化がドッグイヤー単位（犬の一年が人間の七年程度に相当することを意味している）で生じている中で、大学の変化は依然としてヒューマンイヤーに従うしかなかつた。二一世紀はじめの「九月一日」は世界の質的变化をもたらしたといわれている。新しい戦争が始まったとアメリカは言う。何が変わったのであろうか？その前に考へるべきことは、テロの背後にある要因である。

第二次大戦以前からの「負の遺産」もあり、冷戦後の世界の変化もある。特に次の三つの変化が注目される。第一は、東西冷戦構造が一〇年以上前に終焉し、世界の大きな対立点が消滅した。しかし、それは冷戦構造のもとで大国の利害関係の中に埋没してきた、あるいは埋没させられていた多くの民族対立、宗教対立、資源をめぐる部族対立等を一気に顕在化させる事となつた。典型的な例はバルカンである。旧ユーゴスラビアが崩壊し、民族間の対立と殺戮の場になつ

た。アフリカのザイールでも、貴金属、宝石などの力ネになる資源をめぐる部族間の衝突があつた。

第二には、経済のグローバル化が世界の経済システムを市場経済に組み込んだが、移行がうまくいった経済とそうでない経済、外資の活用に成功した国や地域とそうでない国との格差が拡大していくことである。さらに、外資主導の産業化が国内の所得の格差を著しく拡大させていく国では、新たな「特権階級」（ある国ではマフィアと呼ばれるような）を生み出した。

第三には、国際機関の役割に対する懷疑的見方が顕在化したことである。一九九七年のアジアの通貨・金融危機にみられるように、「グローバル化＝アメリカ化」という一種の啓蒙運動が、批判の対象とされるようになつた。しかも、IMFといった国際機関がアメリカの利益を代弁しているという批判を招いた。こうした変化と新たな問題に対しても、世界も日本も的確な处方箋を見出すことができなかつた。これらが九月一日につながつたのであろう。

こうしたテロを根絶するための世界と日本の対応が論じられなければならない。グローバル化に対す  
る漠然とした批判をしていても問題解決にならない。  
第一次大戦前に成立していたといわれる「第一次グ  
ローバル経済」は、その後の第一次大戦と世界恐慌  
によって打ち砕かれて、世界経済は保護主義とプロッ  
ク化に突入した。今日の「第二次グローバル経済」  
によつてもたらされた世界全体に対する利益を損な  
わないためには、アメリカ一極経済を多極化する必  
要がある。欧洲及びアジアがそれぞれ世界経済を担  
う「極」となることが必要である。さらに、グロー  
バル化してしまつた経済システム自体を、上手に運  
用するための「グローバル・ガバナンス」が求めら  
れる。現在の国際機関では不十分であろう。

また、地域協力も経済社会の安定のために必要な仕組みである。現実の世界では、WTO（国際貿易機構）などの国際機関が多くの国や地域を巻き込んでいふとともに、地域協力や地域統合が活発である。アジアでも日本がこれまでの多国間貿易主義

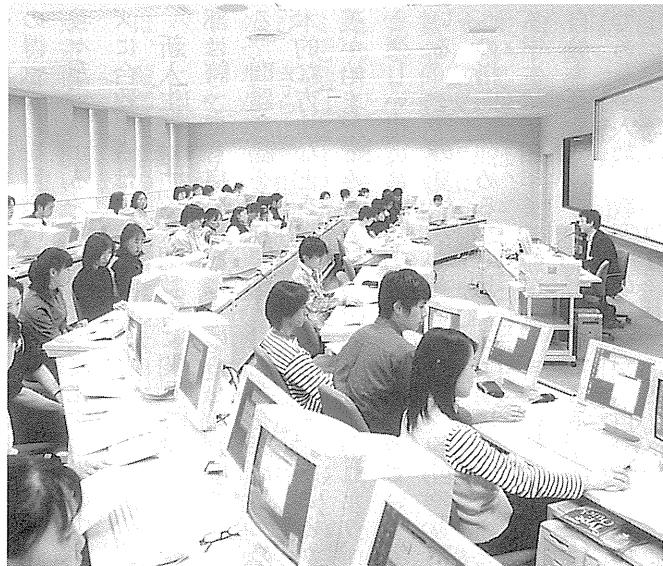
棄てて、シンガポールとの自由貿易協定の策定に踏み切つた。二〇〇一年一月に開催された「アセアン+3（日本・中国・韓国）」の首脳会議においても、アセアンと中国との自由貿易協定が話し合われた。金融部門では、アジア危機のあとに、中央銀行間の決済システムの確立、宮沢イニシアティブの名のもとでの日本のリードによる金融協力体制の制度化がなされた。アメリカ主導のIMFの理念とは異なる金融支援の枠組みである。九月一日は、国際経済システムの進化に対する大きな挑戦であった。この一〇年余りのアメリカの一人勝ち経済が、アメリカに都合のいいグローバル化を世界に普及させたとの批判がある。逆に、京都議定書のような問題に対しては、内向きな姿勢に徹するブッシュ政権が国際社会から批判された。

わが国際経済学部が直面する世界は、大きく変化している。日本がどう対応し、国益をいかにして守るかが問われる時期がきている。こうした時期に、必要な人材を育成することは、教育に携わる人間と

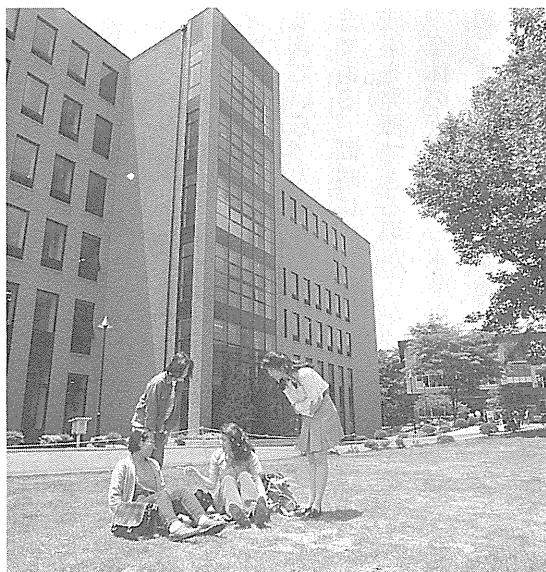
して大きな緊張がある。構造改革の遅れ、先送りが日本の総合的な競争力を低下させている。スイスのローザンヌにある IMD（国際経営・開発研究所）というシンクタンクが毎年行っている世界の競争力ランキングによれば、最近では日本の大学教育のランクはきわめて低い。競争力の総合ランクも低下してきている。人材育成にあたっている身として、残念である。同時に、こうした状況は、麗澤の教育が成果を発揮できる場が広がっているとも言える。日本全体の大学教育の水準が低下しても、少人数でこまかに教育、わかるまで繰り返す教育、こうした麗澤教育の原点に返ることによって、我々の存在意義を高める機会が大きくなっていると言えよう。

近年の傾向として、大学に進学する時点では、大学における自分の目標を認識しない学生も多い。これまで国際経済学部では、学科別の必修科目を減らして、カリキュラムができるだけ自由に選択させる方式を取り入れてみた。しかし、これが多くの学生に満足を与えたかは疑問である。入学時あるいは一

年次の中ごろには、自分の専攻を絞り込むような指導を行うことも考えたい。私たちの学部がどのような人材を育成できるのかをより鮮明にすることは必要である。一定程度の専攻コースを提示して、各コ



1号棟3階のコンピュータ教室



学部創設と同時に建てられた校舎1号棟

スの科目選択の雛型を示す。さらに卒業後の職種などのイメージを具体化し、明確な目的意識をもたせることを考えたい。経済理論、経済政策、ファイナンス、国際関係・協力、企業マネジメント、企業倫理、会計、マーケティング、地域の情報基盤整備、情報技術に基づく産業創生、環境・都市・地域、などのメニューを用意してみたい。全員の学生が自分

の得意分野を目標にして、専攻をつかんでほしい。我々が用意するメニューは、変化する世の中のニーズに合致するはずである。

新入生に対する入門教育に関しては、国際経済学部は誇っても良いほどにすばらしい制度を持っている。問題意識を切り開かせ、思考を深めるための基本的な方法などを教え、考えさせる。ところが、講義が始まつてみると、自分の目標が薄れたり、もつと楽しい現実に時間を割くようになつていく学生もいる。一年の夏休みまで頑張って、各自の専攻分野への指向を強める。そして二学期に元気な顔を見せる学生は、四年まで伸びる。まさに初心を忘れずに、自分を高めていくことが大切である。麗澤の持ち味である少人数の教室での議論が、自分の人生に大きな助けになつたり、指針となる。自分発見の場になる。学生諸君はこうした機会をどんどん利用すべきである。大学を取り巻く環境は厳しさを増している。学生を積極的に参加させる、エキサイティングな「知的バトル」の場として、大学を活性化させたい。

## △特集▽ 「麗澤大学の専門ゼミ」

大学で学ぶ四年間に体験することは、人それぞれに多様です。しかし、その中で、ゼミで学ぶことは、多くの学生に共通する貴重な体験でしょう。そこで、今回の『麗澤教育』第八号では、「ゼミ」を特集することにいたしました。

一口にゼミといつても、麗澤大学には沢山のゼミがあります。平成一四年度、外国語学部では、「三～四年生対象の「専門コースゼミナール」「卒業研究」が四二、一年生対象の「教養ゼミナール」が一五、合計五七のゼミが開講されます。また、国際経済学部では、「四年生対象の専門演習（学科ごとのゼミナール）」が三九、二～四年生対象の「基礎・学際ゼミナール」（学科共通）が一〇、合計四九のゼミが開講されます（ゼミの一覧表を一四頁～一七頁に掲載しております）。その全てを詳しくご紹介したいところですが、残念ながら、十分なスペースがありません。そこで、今回は、「専門ゼミ」の特集とし、外国語学部の「専門コースゼミナール」と国際経済学部の「専門演習」に範囲を絞らせていただきました。学科等のご推薦を受けて、様々な分野から、それぞれ一つか二つのゼミに登場していただき、担当教員・ゼミ生・卒業生に

よって、「おらがゼミ」の自己紹介をしていただきました。担当教員には「私のゼミのねらい・内容・特色・工夫・現状と課題」などについて、ゼミ生や卒業生には主として「ゼミ活動を通して学んだこと」について語っていただくよう、お願ひしました。

麗澤大学では、伝統的に「少人数教育による人間教育」を大事にしてきました。一つの専門ゼミに所属している学生は、三年生と四年生を合わせて約二〇名です。この先生について学びたいと思い、その先生を少数の仲間とともに囲んで、よく学びよく遊びます。研究をし卒論を書くだけでなく、ゼミ合宿・ゼミ旅行をしたり、大学祭にゼミとして出展・出店したりと、ゼミ活動は多様です。その中で、学生は多くのことを学び、さらに、担当教員と学生のつながり、学生と学生のつながり等、さまざまな人間の絆が育っていきます。卒業してからも、ゼミのOB会が開かれたり、キャンパスに恩師を訪ねてくる元ゼミ生がいます。専門ゼミは、麗澤大学の人間教育の大重要な手なのです。

（編集委員長 鈴木康之）

※寄稿して頂いた在学生の学年は、平成一二三年度のものです。

## A. 平成14年度 外国語学部ゼミナール一覧

### (1) 専門コースゼミナール（3年次生対象）

#### 英語学科

##### Aコース（言語・文化研究）

講 義 題 目	担 当 者
20世紀アメリカ短編研究と映画研究序論／アメリカ映画研究	日 影 尚 之
第2言語としての英語の習得と指導	望 月 正 道
英語史研究	中 道 嘉 彦
イギリス文学・文化研究	中 山 理
英語学研究	渡 辺 信

##### Bコース（社会・文化研究）

異文化（間）コミュニケーション	町 惠理子
INTERNATIONAL ENGLISH	Huber W.
Comparative Cultures	McVay P.C.
日米の環境文化研究	犬 飼 孝 夫

#### ドイツ語学科

##### Aコース（言語・文学研究）

講 義 題 目	担 当 者
ドイツ語史研究	草 本 晶
ドイツ文学研究：個と世界	石 村 喬
現代ドイツ語学研究：言語分析の理論と実践	瀬 川 真由美
ドイツ文学に見られるユダヤ的〈知〉	鈴 木 克 則

##### Bコース（社会・文化研究）

Sozialpolitisches Seminar: Mensch und Gesellschaft -Ein Vergleich zwischen Deutschland und Japan	Krummeich R.E.
統一ドイツにおける「心の壁」を探る	奥 野 保 明

#### 中国語学科

##### Aコース（言語・文化研究）

講 義 題 目	担 当 者
中国文学研究—現代の文学	陳 生 保
中国語学研究—近代漢語語法研究	鈴 木 誠
日中対照言語・文化研究	千 島 英 一
中国語学研究—中日対照言語研究	戸 張 嘉 勝

##### Bコース（社会・文化研究）

現代中国の諸問題と日中異文化コミュニケーションの研究	三 渚 正 道
中国の哲学—伝統と現代—	井 出 元
中国における地方文化—フィールドワークの可能性—	金 丸 良 子
中国歴史文化研究	松 田 徹

## 日本語学科

### Aコース（言語文化研究）

講義題目	担当者
日本語教育の諸問題	松本哲洋
日本語教育の諸問題－漢字圏の場合－	戸田昌幸
言語学の不自由から遠く離れて	副島昭夫
日韓対照言語研究	梅田博之
日英対照言語研究	杉浦滋子
女房日記と後宮文化－枕草子・源氏物語を基軸にして－	安藤靖治
近代文学演習	岩見照代
現代日本の大衆文化・生活文化	長谷川教佐

### 4 学科共通

### Cコース（比較文化研究）

講義題目	担当者
人間科学研究方法による人間理解 /Counseling, Human Development, & Human Behaviors	水野修次郎
“媒介者”としての言語—“敬語現象”の言語文化学—	滝浦眞人
日本文化のアイデンティティー	欠端實
マス・コミュニケーションと社会	大竹秀一
文明間の対話と日本	服部英二
家族と社会の比較研究	黒須里美

### 4 学科共通

### Dコース（国際関係研究）

講義題目	担当者
国際社会における法と政治の諸問題	梅田徹
国際関係史（日本と世界）	櫻井良樹
現代アメリカ論	花井等
国際協力論	竹原茂 (ウドム・ラタナヴァン)

## (2) 教養ゼミナール

### 教養ゼミナールA（共通科目、1年生・1学期）

講義題目	担当者
『新約聖書』に親しむ（その1）	鈴木康之
歴史小説研究I	大竹秀一
世界の中の日本	服部英二
韓国の歴史と文化①	朴勇俊
自然科学の基礎と新科学技術情報	多田舜保
自己を知る・他者を知る（1）：体験学習	森川正大
日本語を考える（文法）	星井道雄
歴史観の違いはなぜ起きるか—自国認識と他国認識—	櫻井良樹
社会学で読み解く現代社会	黒須里美
国語科教育法概説	野口芳宏
東洋文化の再発見—中国文化と現代—	井出元

「東南アジアの文化と社会」	竹原 茂 (ウドム・ラタナヴァン)
文化人類学入門	大野 仁美
雲南のハニ族文化	欠端 實
社会適応と不適応について	水野 修次郎

教養ゼミナールB（共通科目、1年生・2学期）

講義題目	担当者
『新約聖書』に親しむ（その2）	鈴木 康之
歴史小説研究II	大竹 秀一
世界文明と日本文化	服部 英二
韓国の歴史と文化②	朴 勇俊
自然科学の基礎と新科学技術情報	多田 舜保
自己を知る・他者を知る（2）：理論学習	森川 正大
日本語を考える（音声）	星井 道雄
日本の近代化を考える—江戸から明治へ—	櫻井 良樹
社会学で読み解く現代社会	黒須里 美
国語科教育法演習	野口 芳宏
東洋文化の再発見—中国文化と現代—	井出 元
「東南アジアの文化と社会」	竹原 茂 (ウドム・ラタナヴァン)
文化人類学入門	大野 仁美
ハニ族の文化と日本の文化	欠端 實
社会適応と不適応について	水野 修次郎

B. 平成14年度 国際経済学部ゼミナール一覧

(1) 専門演習

国際経済学科 専門演習II（3年次生対象）

講義題目	担当者
海外事情研究	大貫 啓行
世界人口特論：少子・高齢化の社会経済学	河野 稔果
情報の経済学	永井 四郎
情報化時代の社会経済システム論：グローバル・エコノミックスを目指して	永安 幸正
現代金融の諸問題	根津 智治
資本主義	堀 元子
世界経済とアジア企業	趙 家林
情報化社会と経済のグローバル化に関する諸問題の基礎的な研究	LAU Sim Yee
日米欧主要先進国のマクロ経済・金融資本市場の研究	佐久間 裕秋
前工業化期日本の経済と人口	速水 融
アジア経済と途上国の経済ガバナンス	真殿 達

国際経営学科 専門演習Ⅱ（3年次生対象）

講義題目	担当者
「ジェンダー・環境・NPO/NGO」(静脈系マーケティング)	大橋照枝
経営管理（ビジネスプラン）	工藤秀幸
21世紀の企業像－日米比較経営史－	佐藤政則
ボランティア活動と非営利組織の経営	土屋武夫
企業と人材：国際人的資源管理	Davis S.T.
企業会計教室	長谷川泰隆
多国籍企業の抱える国際経営課題についての総合的理	花枝美恵子
企業成長におけるマーケティングの役割と使命	堀出一郎
基礎的会計理論の研究	矢澤富太郎
企業と社会	高巖
経営人間学～より幸福な組織生活、より良い企業社会の構築を目指して～	中野千秋
会計情報を活用した企業分析：会計情報の分析と評価	倍和博

国際産業情報学科 専門演習Ⅱ（3年次生対象）

講義題目	担当者
国際比較産業研究：グローバル共生の原理と人間らしさの追求	大場裕之
環境政策分析	小野宏哉
まちづくりと都市システム論	高辻秀興
起業人をめざして	高橋三雄
情報的世界像の探求	立木教夫
マクロ経済理論と政策	成相修
ネットワーク運用技術実習とソフトウェア開発演習	林英輔
現代産業論	宮川公男
コンピュータネットワーク技術論：地域教育ネットワークの構築と運用	大塚秀治
コンピュータネットワークと分散システム／ネットワーク運用技術（基礎）	牧野晋
リスク分析－不確実性の定量的評価	籠義樹
電子商取引における情報技術の戦略的活用	土井正

(2) 基礎・学際ゼミナール（2～4年次生対象）

講義題目	担当者
社会学を学ぶ	浦田広朗
パウル・ティリッヒ	大島末男
スポーツ科学	豊嶋建広
日本の経済・経営倫理思想研究（西欧資本主義との比較を通じて）	保坂俊司
アジアの現在をどう読み解くか	松本健一
生き方の探求	望月幸義
異文化コミュニケーション	八代京子
アメリカの社会と宗教	堀内一史
Business Decisions	Brumby P.P.
Listening Skills, Vocabulary and Discussion for Intermediates	Provo J.E.

## 犬飼ゼミの歩み

——人と自然のあるべき関係を求めて——

助教授

犬 飼 孝 夫

英語学科Bコース（社会・文化研究）



「社会・文化研究コース」（Bコース）に属するこのゼミは、担当者がアメリカ研究と米国史、特に自然・

環境保護の歴史を専門としていることから、「アメリカの自然観」をテーマとして一九九六年度から始まった。二〇〇一年度三月までに四四名のゼミ生を送り出し、二〇〇二年度四月には六期生一二名に加えて、七期生として一〇名の三年生を迎えることになつてゐる。

観が生み出されたのであるから、残された自然は保護されねばならないという自然保護の思想も発展した。

今日、たいがいの国にある国立公園という制度を生み出したのはアメリカであり、一八七三年設立のイエロー

ストン国立公園が世界初の国立公園である。

アメリカは、地球的規模の環境問題への取り組みについては必ずしも積極的とはいえないが、国内においては、多数の会員を有する自然保護団体が幾つも存在する。九〇年代からは、ダムの建設が停止され、川の自然な流れや生態系を回復するために、中小のダムや水路を撤去する措置が取られるなど、自然保護活動が盛んである。

こうしたアメリカにおける自然保護の歴史を学ぶにつけ、学生たちは、「では一体わが国においてはどうなのか」という問い合わせになる。四年次の卒業研究で、わが国における自然保護運動や環境問題について取り上げる学生もあり、手賀沼とその生態系を回復させる試みの歴史について取材・調査し、英文でまとめた学生もいる。私は学生のこうした「比較の視点」を大切にしたいと考えている。

このゼミではアメリカを一つのケース・スタディとして取り上げているが、究極的には、自分の回りの自然や社会（すなわち「環境」と、人々との関わり（すなわち「文化」）について、人文学的に学び、環境と人間のより良い関わり方（すなわち「倫理」）を見いだすこと、あるいはその手掛かりだけでも掴めれば良いのである。そこで二〇〇一年度からは、ゼミのテーマを「日米の環境文化研究」に変更した。環境・文化・倫理・歴史をキーワードとし、比較の視点を持ちつつ、幅広く、かつ深く学べるゼミにしていきたいと考えている。

三年次のゼミでは、発表と討論により、学生の「調べて・まとめて・発表する」力と、自分の考えを明確に述べる力を養う。ゼミでは「毎回必ず一回は発言しなければならない」という暗黙のルールがあるため、発表者とコメントーターのみならず、学生全員が発言する。

四年次生についてはゼミ以外の時間に卒業研究の指導を個別に行う。特に前期には、週に一回の割合で犬飼と面談し、研究テーマを決定する。その際は、各自に「問い合わせ何か?」と問い合わせ、実際に短い「問い合わせ」の文を幾つも書き出させていた。問い合わせを種類ごとに分けて「章」とし、これらの問い合わせに答えていくうちに、論文ができる上がるのだ、と指導している。

ほとんどの学生が英語で論文を作成するが、英語学科の論文作成の授業の成果であろうか、最近では論文の質が向上しているように思われる。また、ゼミでの学びをさらに発展させるべく、アメリカの大学院への留学を目指す学生も出てきていることは、大きいなる喜びである。

## 自然に対する私達の責任と義務

英語学科三年 福岡亜紀子

人間はどのように自然と付き合ってきたのか、またこれからどのように自然と向き合っていくべきなのか。このゼミでの学びを通じて、自然観について考える機会が多くなったようだ。Gifford Pinchot の「自然の保全」(conservation) 「人が天然資源を管理・保護しながら有効に利用する、人間中心主義的考え方 (anthropocentrism)」と、Aldo Leopold の「大地の倫理」(land ethic) 「自然が人間にどれほど利益を与えるかよりも、生態系をいかに健全に保つかに重きを置く生物中心主義的考え方 (biocentrism)」という二つの考えは、いつの時も対立している。

私は、人間の利益よりも環境のことが第一に考えられるべきだと切実に思うのだが、やはりそれにも限界があることに気がついた。私達の今の文明化された豊かな暮らしを考えると、生活上、必要最低限の物しか使わないという考えには無理がある。これは都合の良い考え方かもしれないが、人間が環境を管理・保護し

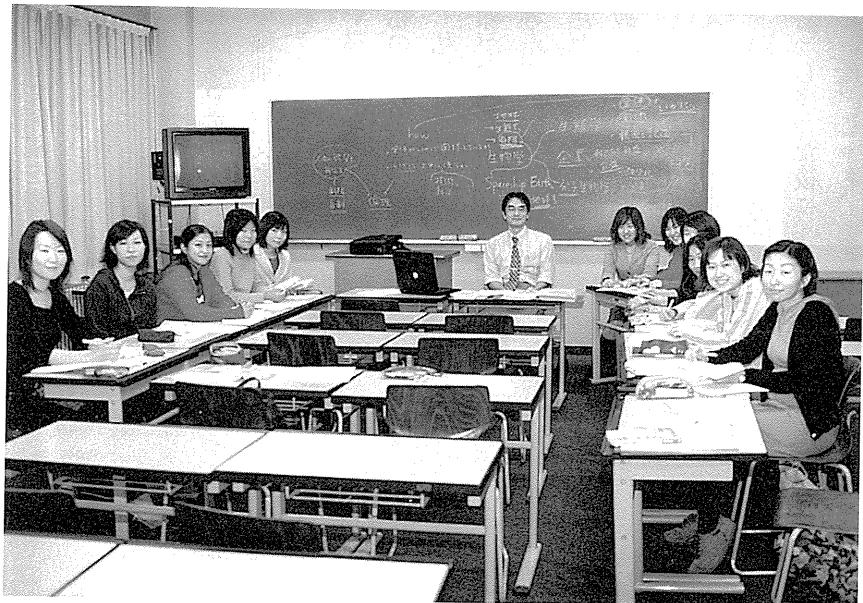
ながら、自然を上手に利用すると同時に、自然のおかげで生かされているのだという、自然に対する尊敬と感謝の念を常に持ちつづけることが、私達の自然に対する最低限のマナーではないかと思う。

一九六九年に人類が月面に立ち、宇宙から地球を見て以来、地球は一つしかない、限りあるかけがえのないものだと私達は認識するようになった。しかし、生活が豊かになればなるほど、環境面では深刻な問題が膨らんでいった。温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、森林破壊、砂漠化、地下水の枯渇、生態系異常、核開発。「このままいけば地球には誰も住めなくなる」「私達の子孫にこの美しい地球を残すことができるのか」誰もがそのような不安を抱くようになるほど、地球は危険信号を送っている。今日、いたる所で環境保護や自然の大切さを訴える声が高まっている。「どうしたら自然を傷つけることなく、暮らしていけるか、どのように自然と共存していくか」今その回答が求められているのではないだろうか。

最近では環境保護団体や環境学者・生物学者だけで

はなく、多くの企業も環境問題に取り組み始めている。「環境にやさしい」「リサイクル」などといった言葉が多用され、いささか環境保護やエコロジーが商業化されているような感があるが、企業がこうした問題に取り組むようになったのも、消費者や市民が環境問題に対して強い関心を払っているからであるし、逆に企業側にも人々に環境保護という意識を強く持たせるような力もあるのではないかと思う。

これから時代は、「循環型社会（リサイクル社会）」「持続可能な開発（sustainable development）」をキーワードとし、資源を管理・保護して持続的に利用する技術開発や努力が必要とされる時代になる。新しいもの、より優れているものを追い求め続けてきた私達は、今、立ち止まって地球をいかに健全に保つかを考えなくてはいけない。それが豊かな暮らしをするいのちの私達の責任・義務（noblesse oblige）なのである。



ゼミ風景 (2001. 11. 26)

## 私を支えるものたち

犬飼ゼミ第一期生

(英語学科・平成一〇年卒・五七期) 細田 奈帆

「先生、大学ってどうだった?」私立高校で非常勤講師をしている私は、生徒達との会話の中でよくこう質問されます。私が即座に「楽しかったよ」と答えると、当然次は「何が楽しかった?」「どうして楽しかったの?」と続きます。そこで私はちょっととの間考え、しかしいつも具体的な答えにたどりつくことができず、生徒達は納得のいかない顔をします。これといった答えを得られない生徒達には申し訳ないのですが、そんなとき私は、「楽しかった」という言葉がすんなり出てくる自分をうれしく思うのです。決して眞面目とは言えなかつたけれども、満足のいく充実した大学生活を送っていたのだと確認し安心するのです。

今回の原稿依頼のお手紙に、犬飼先生は卒論のコピーを同封して下さいました。自分の卒論などもう一度と見ることはないと思つていたので、表紙を見ただけで恥ずかしく、手に取る勇気もありませんでした。結局、

こうして原稿を書いている時点でも、未だにその表紙は開かれていません。「英語学科だから……」ただそれだけの理由で英語で書き始めたので、英語力不足に大変苦労させられました。「細田さんの英語はとても読みやすい」と犬飼先生にほめて(?)頂き、自分の稚拙な英文に赤面したことを今でもよく覚えています。しかし、そんな風に後には表紙も開いてもらえた卒論ですが、「英語で」書き上げたことは、現在の私の英語学科卒というプライドを支えているのです。

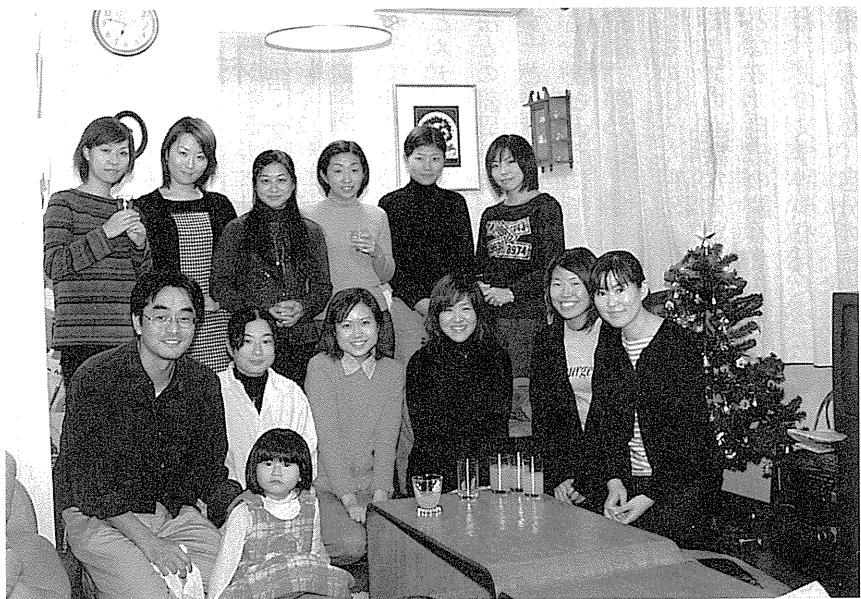
私は大学入学当初から教員を目指しており、その目標が念頭にあったので、教育に関するゼミを選ぼうと考えていました。一方で教育以外に何か自信を持つて語れるものを身に付けておきたいという気持ちもあり、最終的には犬飼ゼミを希望しました。

入学して間もない頃、講読の授業で犬飼先生が小テストの連絡をされたときのことです。「次回は小テストがありますので、みなさん頑張ってください」そうおっしゃった後に、「あつ、『頑張って』はあまりよくないね。じゃあ、まあ適当に」と訂正されました。こ

んな風に書いてしまうと犬飼先生の人格が疑われてしまいそうで、大変失礼だとは思いますが、私にとっては先生の学生に対する接し方が、「一方的でない」とがとても印象的だったのです。そのときの出来事も、私が犬飼ゼミを希望した理由の一つでした。ゼミでもその他の授業でも、犬飼先生はよく「一緒に勉強していきましょう」とおっしゃっていました。そのお陰で私はプレッシャーを感じずに楽しく取り組むことができました。

大学時代に比べ、毎日が忙しく過ぎていきますが、ゆっくりと学生時代（小中高時代を含めて）を振り返ることを忘れてはなりません。それぞれの年代に自分が何を感じ、どんなことを考えていたのか、生徒の気持ちを理解するための努力を続け、私も「一方的でない」授業をしていきたいと思います。

（私立・武南高校非常勤講師）



犬飼先生宅での懇親パーティー（2001.11.26）

## 文学ゼミの「赤い涙」と「嬉しい涙」

教 授 石 村 喬

ドイツ語学科Aコース（言語・文学研究）



外国語学部・ドイツ語学科のAコースの文学ゼミナーを担当して第一に直面する困難は、学生が何を研究したいのかを具体的に気づかせることと言える。「私はゲーテの『若きヴェルターの悩み』が好きです」とか、「グリムの『童話』を読みたい」と言う学生には、まず、大学で文学研究をする場合は、作品は原典批判版で読まなくてはいけないと直接的指導に入れるが、実際には「私は本はあまり読まないけれど、ドイツ文学には興味があります」とか、「何か良いテーマはあるでしょうか」という学生が少なくないのが現状である。そのような学生には、まず文学作品を越えて、何に興味があるのかを問うことから始めなくては

ならない。「ドイツ語は好きですが、言語学では大変そうなので」というような学生には、文学作品の文体とメディアの文体の差異、詩作の語法と日常言語の语法との差異を調べることを勧めたり、「旅行が好きです」というような学生には、「旅」というテーマで作品を読むように指導したりし、単に読むのではなく、読み、考える習慣をつけるようにするのである。

このような個別テーマの指導の他に、文学研究をする上で必要な知識をゼミ生に覚えさせることも必要となる。自分の読んだことのない作品の内容を知るには、どの文学辞典を見たらよいか、文学概念はどこで調べるのか、自分の読後感を研究レポートや論文にま

とめるには、何を書くことが必要で、何を書く必要がないのかといったことである。作品が「おもしろかった」から「どこがどうおもしろかった」へ、そして、「どのようにおもしろかったのか」から「このような原因と理由でおもしろかった」へ、最終的には「そのような原因と理由でおもしろかったとせざるを得ない」となるまで、換言すれば、所謂、感想文から論文に変容させる技術を学生に学ばせることが、文学ゼミでしなくてはならないことになっている。

そして実際のゼミの場で外国文学を勉強するためには、まず、語学的障壁（恐らく学生にとっては日本語で読む時間の二〇倍以上の時間をかけて原文を読まなくてはならず、小説を一冊読むのに大事な夏休みを潰すはめになつたりする）を越え、楽しかった読書を台無しにしてしまう無味乾燥な分析（文体分析では、極端な話、コンマとピリオドの数さえ数えさせられたりする）をし、自分の考えを滅茶苦茶にしてくれる研究論文を参照しなくてはならない。さらに、レポート・論文を書きあげると、教員から、引用の仕方、括弧の

使い方、注のつけ方、参考文献の挙げ方と、一行一行、一所懸命に書いた文を、ほとんど原文を留めないまでに直され、添削の赤が「赤い涙」に見えてきたりしてしまう。挙句のはてに、「なかなか良く纏まってるね」、「添削の納得のいかない所は、自分の意見を守らなくては」などと、訳の解らないことを言われ、「それを書き直して何月何日までに提出して、その後は、テニョハ程度の直しだけ」などと言われるのが、可哀想な文学ゼミ生の実態だ。

しかし、このような道筋を学生が歩むことで、それぞのテーマを越えて、学生がまず語学的能力を獲得し、文学作品に限らず、種々の文章の特質を判断できるようになり、未知の事柄に触れた際に、それを調べ、対処できるようになり、その上、生活の指針となるような作品、繰り返しそに戻つて物事を考えることができる作品に出会い、さらに、ゼミの発表やレポート、卒業研究の体験から、自分の意見を相手に納得のいくように発表ができ、他者の意見を聞き、理解、判断できる能力を養うことができるようになれば、特定の知

識で問題を解決する技術の習得を目標とするのではな

い文学ゼミの目的は十二分に達せられたことになろう。

これまで、様々な性格の学生とゼミで出会ってきたが、それぞれの学生が社会で苦労しながらも活躍している場面に出会つたり、自分の読んだ作品が生活の力になつてているなどと、リップサービスをされると、思わず「涙」ぐんでしまうことがある。また、「出張

で近くに来たので」とか、「この所、忙しく、疲れて

しまつたので、先生のお茶を飲みにきました」などと言つて、突然、夜の研究室に現れたりすると、ゼミをしていて良かつたと、「嬉しく」なつたりしてくる。

## ヤミを通じて学んだこと

ドイツ語学科三年 高瀬 真子

たくさんの本に囲まれた研究室で、毎週月曜日の五限目に私はゼミに参加しています。同じ学年のゼミ生は私を含めて三人。先生の近くに座り、話しができることは、普段の授業ではありませんないので、私はこの週

一回のゼミの時間を心から楽しみにしています。

私が参加している石村先生のゼミでは、ドイツ文学を扱っています。三年生の私はドイツ文学という広い枠の中から自分のテーマを見つけ出し、卒業研究のテーマを探す作業から始まりました。詩、小説、劇という三つの分野に分けて、各自的の文学作品解釈をしています。

現在、Hirde Dominが書いた “Lied zur Ermungung” という詩を読んでいるところです。作者自身によるこの詩についての解釈を読み、その後、文学者による同じ作品の解釈を読み進めていきます。作者の書いた詩が一つの作品として独立し、その作品について作者自身と文学者が解釈しているのです。詩いうものは言葉少なく表現されるのですが、その分、一語一語に深い意味があることを知りました。さらに違う人がその作品に触ることで違った解釈が生まれてくるのです。いったいどの解釈が正しいのでしょうか？ こうして文学作品をいつもより深く掘り下げて観照し、作者が意図するものを探していくことに面白さを



ドイツ語学科共同研究室でのゼミ風景

感じています。

私がこのゼミに参加したいと思つたきっかけは、昨年九月から一年間にわたりドイツのハレの街で留学生生活をしたことに遡ります。ドイツでは、演劇やオペラなどが日本に比べると随分盛んで、ほぼ毎日のように公演が行われていました。私は以前から演劇に興味があつたので、多くの作品を見る機会を持てました。ある日、ブレヒトの作品“Dreigroschenoper”を見ました。残念なことに舞台の上で発声される言葉は早すぎて、しかも、絶叫することが多かつたので、聞き取ることが難しく、充分な理解はすることができなかつたのですが、演出や舞台変化が印象的でした。

そして、運がいいことに、日本へ帰つてみると、そのオペラが「三文オペラ」として上演されていたのです。実際、日本の舞台でその劇を見た際には、そこで語られているセリフはすべて理解できたのですが、作者が伝えたかったことが何だったのかについては明確には理解できませんでした。そのため、その時は、唯ただ、作者の真の意図を知りたいと思いました。ブレ

ヒトは、現代劇の一つの手法を完成させた人で、人を

感動させて判断力を失わせてしまうことのない劇を作り上げた劇作家です。悪事でさえも演劇においては、

人を感動させてしまえば、良いことに思えてしまうからです。そのため私が見た『三文オペラ』にも、ブレヒトが演劇を通して何を伝えたかが表現されている筈なのですが、それについても、これからゼミに参加しながらその答えを見つけていきたいと思っています。

こうして勉強していくと、作者の意図するものは、その当時の時代背景や社会的なものに深く関係しているということを知り、改めて文学の解釈の難しさを感じています。文学に触ることと同時に、ドイツの国、社会全体の流れも勉強していく必要があるようです。ゼミを通して私は文学を楽しむための第一歩を教わったように思います。これからもさまざまな文学に触れ、自分のテーマを明確にしていきたいと思っています。

## 人生の岐路に立つ

～石村ゼミ「荒野の狼」に学ぶ～

(ドイツ語学科・平成二二年卒・五九期) 渋谷 昇一

時の流れというのは早いもので、麗澤大学を卒業して以来、二年の歳月が過ぎようとしている。その短い時間のうちに二十一世紀となり、先頃は、アメリカで同時多発テロが起り、回教国の多くの地域ではイスラム対キリスト教の図式が現実味をもち、一方、発展に陰りが見えている資本主義社会では、その低迷の長期化の責任を「オサマ・エックスキューズ」で転嫁しかねないような、先行きの見通しのつかない現代社会となり、それが学生時代とは違って、社会に出た身には痛切に感じられる。

しかし、こうした厳しい現実にこそ、学生時代に学んだことを支えにして、心だけは豊かにして生きたい。その中で今でも心の支えとして心に残っていることは、ゼミで石村教授に薦められた、『荒野の狼』というH・ヘッセが一九一七年に発表した作品である。この作品を卒業研究の対象にして、私は作品の時代背

景と主人公の存在様式を調べ、それが、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の、所謂、一九二九年に始まる世界恐慌直前のヒットラーやムッソリーニに代表されるナショナリズムの擡頭する時代と帝国主義の時代に、列強間の利害が対立し、不安定な世界情勢の中、

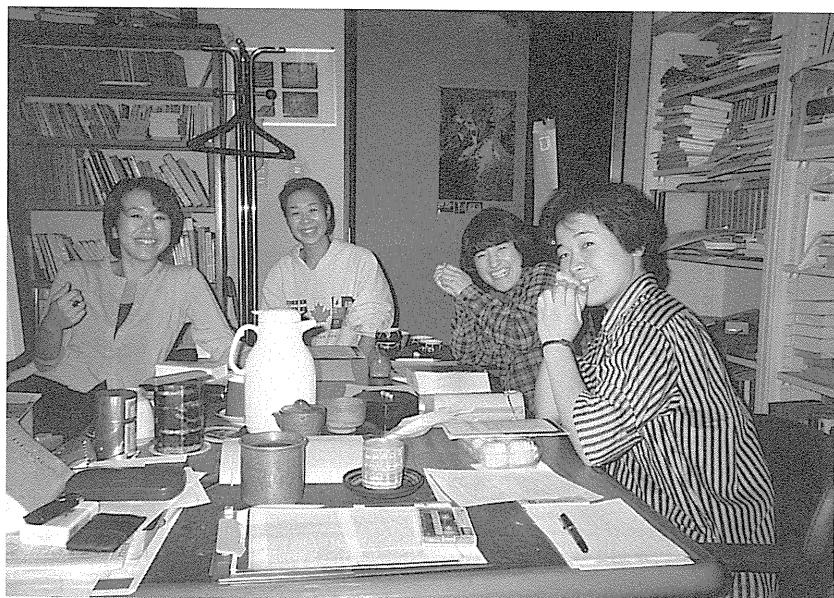


当時のゼミ終了後、後列が渋谷さん（1999年10月）

社会が外的に繁栄しても、それが個人の精神的豊かさに繋がらないという時代環境の中で書かれたことを知った。主人公は孤独に暮らす一人の得体の知れない、失業者とは言わないまでも、定職のないらしい人間で、作品の中心は彼の心理描写であると言つても過言ではない。この、都市にいながらも社会との関係を持たずに、一匹狼のように生活する主人公の存在に、今でも親近感を覚え、そのような視点から社会を見てしまうのは、景気の冷え込みを身近に感じる現実社会で生きなくてはならない自分自身の思い入れなのかも知れない。

平和主義者であり、ヒッピーの原形とも言えるH・ヘッセは、厭世的な態度の裏に、世間の型にはまらず、理想を謳い、互いに生きる価値観や喜びを人々のすべてと分かち合おうとしていた。

社会に出てからは、ゼミの時のように、前後を顧みず、わがままに、自由主義的な自己主張を強くはできなくなってしまった。もつとも今では、ゼミでも、私達の議論は気づかぬうちに操作されていたような気がするが、それでも、そのような自己主張の強さのあ



石村先生の研究室で交流するゼミ生たち（1999年10月）

る自由主義者を、私は大好きでしようがない。

世間では、就職難の影響で失業者、転職者、未就職者が激増している事態を深刻に受け止めているが、そのような状況のこの二年間で、私は「荒野の狼」に成り済ましながら（私の思い入れはきっと強過ぎるのかも知れないが）、転職を二度繰り返した。そして、この九月には、ゼミでお互いに心情を吐露した人と結婚もした。独り身ではなくなり、もうそろそろ『荒野の狼』から卒業したいと思っていたこの時に、以前からしたいと思っていた職種につくことが決まった。日常の拘束から一步離れた自由の場を提供する仕事ができるホテルに勤めること、憧れていたシェラトン・グランデ・トーキョー・ベイホテルへの転職が決まった。

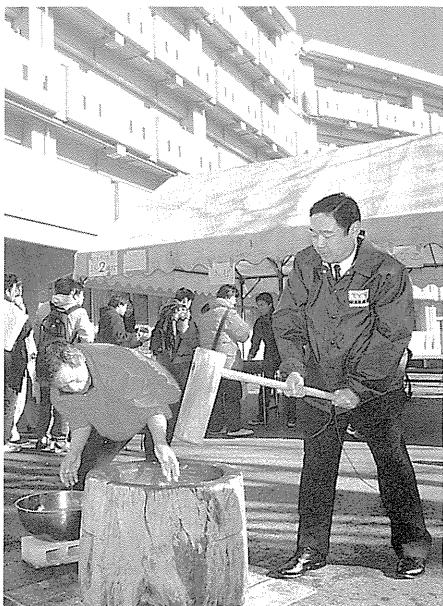
「一人ではここまで来られなかつた」と、ふと思う。「お蔭様で」という言葉通り、陰で支えてくれた人達、沢山のわがままを聞いてくれた人達に、ゼミをはじめとする学生仲間に、感謝の気持ちをずっといつまでも忘れないでいよう。

（シェラトン・グランデ・トーキョー・ベイホテル勤務）



キャンパス内に飾られた  
巨大クリスマスツリー

恒例の「国際交流もちつき大会」  
廣池学長も「ヨイショ」(2001. 12. 11)



きな粉餅など手際よく作るRIFA（麗澤国際交流親睦会）のメンバー (2001. 12. 11)

# なんてつたつて中国

—現代中国を浮き彫りに—

教 授 三 瀦 正 道

中国語学科Bコース（社会・文化研究）



## (1) ゼミのねらい

現代中国をあらゆる角度から総合的に研究。中国の新聞やインターネットから自分で情報を集め、解説し、分析します。様々なテーマが、実際はすべて深いつながりをもっている、そのダイナミズムが見えてくれれば、しめたもの。政治とか経済に偏るのでなく、環境、教育、庶民生活などを総合的に捉え、立体的に中国を考察します。

## (2) ゼミの進め方

△ゼミ合宿▽ ゼミへの参加は二年生修了後の春休みの合宿への参加から。三泊四日で、中国の新聞記事を材料に、現代中国の動向をつぶさに観察します。普通

の授業の一年分は読破。他大学の学生や社会人も含め、毎回三百人以上が参加するこの合宿は、毎年春・夏二回実施されます。

## △三年生の授業▽

一学期：まず、日本の新聞の中国関係記事を輪読しつつ、政治経済社会等に関する基礎知識を養います。また、中国の新聞記事のうち、特に重要なものを読み進みます。

夏休み前に、各自、仮研究テーマを決定。どんなテーマがあるか、学生の知識がまだ不十分なので、三瀦が中国の新聞記事の分類用に設定している一二〇ほどの分野を参考に決定します。人民日報の記事

は、常にスクラップして分類してあるので、最初はそれをフルに活用。また、人民日報以外の様々な資料の利用方法、インターネットでの情報収集法、関



平成13年度 大学祭での三潴ゼミ展示風景

係CD-ROMの使用法にも熟達していきます。  
二学期：大学祭で、各自、仮テーマについての基礎学習の成果を発表します。二学期は、毎週、最近一〇日間の主要な中国の新聞記事を読みこなしていく一方、一月のプレ論文提出に向け、三潴と相談しながら、テーマを掘り下げていきます。

#### △四年生の授業▽

一学期：就職活動の合間を縫つて、プレ論文のテーマに合わせて情報収集を心がけます。授業では、やはり重要記事を読み進んでいきます。

二学期：大学祭で、各自、卒論の骨子を発表。一二月の仮提出に向け、ラストスパート。仮提出後、五日以内に三潴から訂正指示の電話がなければ楽しいお正月が。

#### △二〇〇一年春卒業生のテーマ▽ (3) テーマは多彩

台湾住民の中台問題に対する認識の差異／中国の電子商取引／上海浦東開発／四川、重慶の地域開発／中国の消費構造の変化／中国のイスラム社会の成り

立ち／中国映画の歴史と展望／中国の鉄道建設の意義の転換／カナダ華僑

#### △四年生のテーマ▽

中国の高齢化とその問題点／中国インターネット事情／ハリ族（日本びいき）の社会的影響／中国の社会福祉／身体障害者の社会参加／中国の観光業の発展／ハイアル公司／中国の基礎教育改革／日中問題△三年生の仮テーマ▽

中国人のレジャー消費／中国の証券市場／中国の鉄道インフラ／ローンの発展／三峡ダム建設／中国の環境破壊／沙漠化／中台関係／中国の高等教育

日報』。まず合宿前に、三日間では読みきれないと思われるほど大量な『人民日報』のスクラップが送られてくる。一通り目を通してから合宿に臨むのが望ましいとされている。

合宿では一人一人に翻訳の担当が割り当てられ、先生の解説を交えながら記事を読み進める。一見普段の授業と変わらないようだが、学ぶ環境が一風変わっている。大きな座敷に座布団を敷き詰め、机にはお菓子があふれ、座り疲れれば横になる。話をきちんと聞いてさえいれば、お菓子を食べても横になつてもいいのがこの合宿のルール。他大学の学生や聴講生も多く参加するので、ゼミ生以外の人との交流も増え、たいへん賑やかになる。

#### 中国の観光ブームを研究した二年間 —ゼミ合宿での達成感と楽しかった食事会—

中国語学科四年 有坂 直子

二年生が終わった春休みの合宿から三瀧ゼミはスタートする。合宿は三泊四日、春と夏の年に二回、キャン

パス内の研修寮で行われる。教材は中国の新聞『人民

三日間新聞を読み続けるのは決して楽なことではないが、たった三日で確実に読解力は身に付き、中国の経済や文化について幅広い知識を得ることができるのだ。そして何より大量の新聞を読みきったあの、あの達成感は何とも言えない。

三瀧ゼミでは三年生の中に、卒業研究に向けてのテー

マがほぼ決まる。普段の授業で中国の経済や時事問題について学び、その内容は幅広く、分野が限られていないため、それぞれが興味のあるテーマを見つけられる。もちろん四年生になってからテーマの変更も可能だが、早い時期にテーマが決まると、それだけ時間をかけて研究を進めることができる。

私の研究テーマは“中国の観光業の発展”。中国が二〇〇〇年から設けた、年に二回の長期休暇が観光ブームを巻き起こし、レジャー産業は急成長し、様々な経済効果がみられた。この二年間で観光業がどのように成長してきたかを細かく調べることができたのは、三年生からこのテーマについて調べを進めてきたからだと思う。早い時期のテーマの決定が卒業研究に大いに役立っている。

三瀧ゼミには忘れてはならない恒例行事がある。食事会と料理教室だ。食事会は大抵先生の自宅で行われるが、人数が多くなると公共施設を借りて料理教室となる。みんなで餃子を作り、あとは先生がお得意の中華料理を食べきれないほど振る舞ってくれる。食べ物

の話しかすると授業が進まなくなるというだけあって、料理の腕前はなかなかのものだ。いつもつい食べ過ぎてしまう。中華料理以外でも特においしいのが先生の特製カレー。たっぷり時間をかけてスペイスから作るというこの本格的な特製カレーはかなり好評だ。三瀧ゼミに入ったら、この特製カレーを食べずして卒業はできない。

三瀧ゼミは厳しいという評判があるが、確かに間違つてはいないと思う。私自身この二年間に、ゼミの選択を誤ったのでは、と考えることが何度もあった。しかし、今は三瀧ゼミを選んだことを後悔するどころか、正しい選択だったと思える。確かに合宿やレポート提出などつらいことは幾度もあったが、今振り返ってみると、結局そのつらさはいつも自分のためになっていた。

このゼミで本当に色々なことを学んだが、ここで得た知識は社会に出てからもずっと役に立つと思う。中国の経済に興味のある人はもちろん、自分が何に興味があるのかまだわからない人にも、三瀧ゼミは本当にお勧めです。

## 三瀬ゼミで得られたもの

### —充実したゼミ合宿—

(中国語学科・平成二二年卒・六〇期) 土屋 哲男

私は、大学卒業後、国費留学生の試験に合格し、現在、四川大学に留学しています。ゼミの卒論のテーマが、「四川、重慶の地域開発」で、更に研究を深めようとして、大学時代に続き二度目の留学を決めました。その一方、中国関係の様々な研修を企業に提供する会社の契約社員として、三瀬先生の指導の下、chinaviというサイトも運営しています(先生の中国時事コラムも毎週掲載中)。

三瀬

我々、元三瀬ゼミ生にとって、ゼミでの思い出と言えば、おそらく一〇〇人中一〇〇人全員が、「人民日报(中国の新聞)とゼミ合宿!」と言うことは間違いないでしよう。大学を卒業している現在、学生時代を回顧してみても、ゼミの思い出は、中国の新聞を読んだ記憶がほとんどで、ほかのことが思い出せないほどです。特に春休み、夏休み恒例の三泊四日のゼミ合宿

の印象は強く残っています。

このゼミ合宿は、冗談ではなく本当に朝から晩まで缶詰状態で中国語の新聞を読み、中国漬けという状態で現代中国問題を考えます。毎日の予習が結構辛く、深夜二時三時まで翌日の準備をしていたことを今でも鮮明に覚えています。不思議なもので、合宿中は「こんな合宿二度と御免だ」と思った事も一度や二度ではないのですが、合宿から半年もたつと、無性に大量の中国語新聞を再び読みたくなり、体中がうずうずしてきます。

今思えば、あのような合宿がなかつたら、ひとつのことに対して短期間に集中して勉強するという機会、何かを徹底的にやるという機会はなかつたでしよう。苦しい事を乗り越えて毎回合宿が終わつたときの達成感は、言葉では表せない格別なものがありました。今となつてはよい思い出です。

毎週のゼミは、ただ新聞を読むのではなく、中国で起きている諸問題について、深く読み込む授業です。現在の中国のおかれている状況を念頭においた上で、

新聞を読む授業です。毎週ひたすら新聞を読む授業だったので、ゼミに在籍していた当時は、正直言つて「また今日も人民日報か」と思つたときもありました。しかし、今考えてみれば、三瀬ゼミのように時事問題を

取り扱う場合には、毎回の積み重ねが非常に重要なのはではないかと思っています。

初めは中国事情についてわからないことも多かったのですが、毎回毎回のゼミの積み上げによって、いつの間にか知らないうちに中国事情を理解してしまったという感があります。また視野を広げるという点でも非常にためになつたゼミだったと思ひます。その意味では、三瀬ゼミというのは、専門科目である中国時事問題を学ぶと同時に、毎日の積み重ねの重要さということを学べたゼミだったと思ひます。

大学時代にゼミで学んだ事が現在どのように役立つているのかと言われても、現段階では具体的なことを答える事はできませんが、苦しさを乗り越えてひとつのこと徹底的にやり通した合宿の経験と、日々積み重ねを繰り返したゼミの経験は、今後、役に立つだろうと思っています。

中国のWTO加盟が実現して、今ほど、中国研究が必要とされる時代はないでしょう。多くの後輩に三瀬ゼミへのチャレンジをお勧めしたいと思います。



三瀬先生宅で「食事会」(1998年12月)

## 「松本ゼミ」つてどんなゼミ?

——どうして戦前の日本語教育を  
ゼミのテーマにしたのか——

教 授 松 本 哲 洋

日本語学科Aコース（言語文化研究）



一九九四年にゼミを担当することになり、最初ゼミの内容を何にするかいろいろ悩んだが、留学オリエンテーションや授業中にいつも学生に話していたことをテーマにしようと決めた。それは日本語学科が開設される前に台湾に出向していた時の出来事である。麗澤

その学生が特別なのではなく、日本語学科にいる学生も五十歩百歩である。共に勉強している同級生の国のことについてあまり知らず、また関心を持つとともに少ない学生が少なくない。

将来、日本語教師になり、外交上の問題などが発生したりすると、学習者に教師自身の意見を求められることがある。日本と学習者の国との歴史的なことを知らずに、どのように答えるのであろうか。

一九八〇年度後半に日本語学校の乱立、上海事件（就学生的査証が交付されず、上海の日本領事館に多数の中国人が押しかけた）等が起きた。一世紀前にも台湾の人は、日本の若者が過去の日本と台湾との関係を知らないことに、驚きよりも腹立たしさあるいは悲しみを感じたのではないだろうかと思つた。

台湾の人は、日本の若者が過去の日本と台湾との関係を知らないことに、驚きよりも腹立たしさあるいは悲しみを感じたのではないだろうかと思つた。

生が来日し、一部の者は「学商・学店」（安直な速成教育を施す学校）と呼ばれた学校で学んでいたということである。

「賢者は歴史に学び、愚者は体験に学ぶ」ということばをモットーに、ゼミでは学生と共に在日外国人の現状を知り、日本語教育を通して過去に遡り、事実を見極め、未来を洞見できる力をつけたいと思っている。

## ゼミ一言

（平成一三年度日本語学科四年生・松本ゼミ七期生）

### 佐々木しづえ

松本ゼミは、日本語教師を目指している人や、日本語をもつともっと知りたい人、またアジアのことを気にかけている人に、ピッタリのゼミです！ 私は、僕は、全然日本語の知識がないし…という不安があると思います。でもそれは間違い！ ゼミに入って、新しい知識を持てば良い！ お部屋には温かい紅茶と笑顔が素敵な松本先生が待っています。

佐藤好希子

松本ゼミでは、日々真剣に！？ 日本語教育に関する諸問題について取り組んでいます。三年次には、在日外国人の問題や、戦前海外で行われていた日本語教育について、発表を交え意見交換を進めていきます。四年次では、主に卒論の作成がメインなのでしょうか。いや、夏に行われる合宿で爆発することが課せられた使命なはず。何はともあれ、思い立つたら即行動。是非足を運んでみてください。

### 志賀 道子

松本ゼミがどんなゼミかというと…まず、自分の知識のなさがばれてしまう危険なところです。でも、大丈夫（大丈夫なのか？）！ それは仲間がいるから。みんなで助け合って、お茶を飲みながら、先生の面白い冗談に笑いながら（？）、ゼミは続していくのです。日本語教育に興味があるなら、ぜひあなたもこのゼミの一員に。そうでなくとも、多くのことを学べるはずです。

甚野 直美

一年半松本ゼミに所属しています。温かい紅茶と美味しいお菓子。心から充たされる思いで発表をし、また友人と切磋琢磨することで自分の可能性を存分に引き伸ばすことができます。自分が今まで知らなかつた未知の世界を見ることができるこのゼミは、きっと刺激を与えてくれるでしょう。白紙の紙に少しずつ色を塗つていきたい方にピッタリなゼミです。

諏訪部圭子

日本語教育界の「今」を知ることのできる学会への参加。日本語教師として、日本、世界で活躍している先輩方からのメール。刺激を受け、日本語教師になるために何か行動しようと思えるはず。そう思つたあなたに、学内でのチャンスが、このゼミにはきっとある…。

田中 明美

### ゼミ活動を通して学んだこと

このゼミの授業内容は、教授法というより、日本語教師として、日本語学科生として、日本人として、知つ

ておかなくてはいけない近隣の国々との関係や日本語教育の現状と過去についてが主です。卒論のテーマも自由であるなど、日本語教師志望である必要はありませんが、志望者の多いこのゼミでは、授業の他にもネットワークを作るという意味で、ためになるものかもしれません。

本郷 茉実

松本ゼミは毎回豪華な？お菓子を食べながら、アットホームな雰囲気の中で日本語教育についての諸問題などを、真剣に時には先生お得意のギャグをおりまぜながら、激しいトーキバトルが繰り広げられています。そんな松本ゼミに挑戦してみたいあなた！ ゼひ足を運んでみてください。

（平成八年度卒業・松本ゼミ一期生） 加藤あさぎ  
将来は日本語教師になりたいという思いで松本ゼミ

に入った私が、一応日本語教師という肩書を持つようになって二年近くになります。ゼミ活動を通して学んだことは数多くありますが、特に二つの大きなことを学んだと思います。一つは、日本語教育の現場に携わる者としては知らないでは済まされないような日本語教育の歴史や、日本語を学ぶ人・日本語を学ばなければならない人を取り巻く問題やその背景を知り、それについて考えるということです。芝山巖事件や指紋押捺の問題について学んだときの気持ちは、今でもはっきりと覚えていています。



潮来簡保保養センターで中間発表合宿  
(1998年9月)

もう一つは、教育現場には欠かすことのできない教材・教具といったものについてなのですが、同期のゼミの仲間にも、教材開発をテーマに卒業研究を行った人が多くいました。自分の特技を生かしたり独自の工夫を凝らすことで、授業が本当に生きたものになると、いうことは、この時に学んだように思います。

毎日、目の前の授業をこなすことに追われている自分に気づいたとき、立ち止まって初心に帰ろうと思ふことがあります。そんなとき私はゼミで学んだ日々を思い出すのです。

(平成九年度卒業・松本ゼミ三期生) 黒須由利子

日本語教師として必要な知識、知つておかなければならぬことは、日本語についての基本的な知識はもちろんのこと、その他様々な分野にわたっていると思う。その中でも、日本語教師になる前に知つておかなければならぬこと、「日本語教師はどんな歴史の上に誕生し、どんな役割を担ってきたのか」そのことを大学時代にゼミで学べ、本当によかったです。

日本語教師として働き始め、感じること、しなければいけないと思うことは、「自分自身の意見を持つ」ということだと思う。ゼミで先生や友人と意見交換したことで、自分自身の意見をもてるようになった。特に、歴史観については非常に勉強になった。韓国、中国の学生に必ず意見を求められる。意見を持つていなければ、学生に相手にしてもらえない。あの時間は、今日本語教師をしている私にとって大切な時間であった。これからも自分の意見を持った教師として働けるよう、ゼミでの時間を生かしていきたい。

(平成一〇年度卒業・松本ゼミ四期生)

鶴森 聖美  
（うづもり

何でも受け入れてもらえる、と言うのが私の松本ゼミ評。

色々な学生が色々な方向を見据えていた。そんな中で、私はなかなか方向を決められずフラフラしていた口。日本語教育に魅力は感じるものの、その一本に定める程の自信がない。とにかく、興味を覚えた所を覗き、多くの引き出しとフットワークを手に入れて卒業した。

(平成一二年度卒業・松本ゼミ六期生)

佐藤恵了哉

私は現在、日本語学校で講師をしています。先日、ある韓国人の学生が、「日本に興味をもてなくなつたので、帰国します」と言ってきました。彼は、以前は日本に大変興味を持ち、日本に憧れて日本に来たのですが、一年半の日本の生活で日本への興味を失つてしま

して、社会勉強をしようとO-SIになつたが、日本語教育との縁は切れず、夜や休日にボランティアで教えていた。そこで沢山の外国人と接する内に、唐突だが世界が見たいと思い立つた。思い立つたが吉日。今年は会社を辞め、三ヶ月間地球一周の船旅に出た。二カ国で多くの出会い。皆、自国の事や言葉を嬉しそうに教えてくれた。すると、私も自分たちの事を紹介したくなってしまう。互いの国を身近な所に引き寄せ、縁の糸を結ぶ瞬間はたまらない。まだまだ、ゼミの師にお伺いを立てる事はなくならない予感がしてきた。これからも我が人生を左右しそうな、この気きまわ併せ。これもまた、ゼミの副産物かもしれない。

まったくの興味を広げる人もいれば失う人もいる、と言つてしまえばそれまでですが、私は少し淋しい気持ちになりました。

松本ゼミでは、教師と学生という関係以前に、人対人の人間関係を築き、お互いの文化を尊重し合い理解しようとする姿勢が重要であるということを学びました。外国人の学生にとって一番身近な『日本』は日本語教師であって、教師からどんな印象を受けるか、教師とどんな関係を築くかということが、彼らの日本観に、そして彼らの日本語学習に大きな影響を及ぼすことがあります。日本への興味を失った学生と接したときに感じた淋しさ、そして「なんとかしたい」という気持ちは、松本ゼミで得た財産なのかなと思います。

(平成一二年度卒業・松本ゼミ六期生) 本田 梨沙  
「自分から積極的に行動すること」、この一言に尽きると思います。松本ゼミは、自分のやりたいことをのびのびとできるゼミでした。しかし、その自由さは、何かの指示を待っていたのでは何もできない、という

厳しさを併せ持っていたと思ひます。松本先生は、「自分の興味を広げ、知識を深めるためには、単に大学の授業だけにとどまるのではなく、自分から積極的に行動することが大切だ」と、常々おっしゃっていました。それで、私達ゼミ生は、チューーターや、地域ボランティアや、日本語学校見学などをしてきました。中でも、日本語ボランティアとしての経験は、私の卒業後の進路に大きな影響を与えたしました。ここで日系子弟と出会ったことがきっかけとなり、現在、ブルジルで日系人の子供たちに日本語を教えています。思うようにいかないことも多く、試行錯誤の毎日ですが、とても充実しています。今後も、ゼミで培った能動的態度を忘れずに、いろいろなことに挑戦していくたいと考えています。

(平成一〇年度卒業・松本ゼミ四期生) 流石 紗代

(執筆は、日本語学科三年に在学当時)

松本ゼミでは、日本語教育における諸問題について研究しています。と言つても、文法事項や、音声など

の日本語教育の内容についてではなく、日本語を教える上で、教師として、日本語学習者に対するための大前提となるものを考へてゐるのです。

どんなに文法や、音声についての知識があつても、良い日本語教師にはなれません。それは、日本語教育が、第二次世界大戦という悲しい歴史ぬきには語れないというところにあります。今日、日本の経済発展を反映して、海外での日本語学習熱が高まっています。そして、その大部分は、中国、台湾、韓国をはじめとするアジアの人々です。日本は戦時下で、アジア各地を占領し、植民地政策で創氏改名や、日本語教育を強制的に行いました。

この歴史を知らずに、教壇に立つて、日本語教師を通して日本という国を見る学習者と対することができないでしょうか。このようなことから、当ゼミでは、海外（主にアジアの国々）で行われてきた日本語教育について、毎回、文献を読み、担当者がレジュメを作つて発表し、互いの意見やコメントを聞き、問題について考へています。

四年生の卒論のテーマは自由で、今まで学んだことをさらに深く掘り下げて研究したり、今までのことを踏まえて、日本語の教材研究・教材作成を行うというのが主なテーマになっています。

ゼミ合宿での卒論の合同発表や、実際に海外で日本語教育をしているOBからの報告など、先輩、OBから学ぶことはとても多いです。また、ホームページ作成も合同ゼミで行っているのですが、メカアレルギーと闘いながらも、みんな楽しく取り組んでいます。アレルギーがあつても、やつてているうちにだんだんと免疫がけてくるものなのです。

このように、松本ゼミは、自己発信型人間養成所とでも言つることができるでしょうか。自分から動かないと何も始まらないのがこのゼミの怖いところですが、動き出したらけつこう充実した時間を過ごせるのが、このゼミのスゴイところです。

※流石さんの文章は、「麗澤大学NEWS」（一九九八年第三〇号）より転載しました。

## 「家族と社会の比較研究」ゼミ誕生

助教授

黒須里美

四学科共通Cコース（比較文化研究）



いま家族に、そして家族をめぐって、何が起こっているのか。少子化・高齢化などを含むマクロレベルの人口問題と、ミクロレベルの結婚・出生・ジェンダーを、社会学的視座から研究しようというのが本ゼミのねらいである。ひと昔前の家族や、様々な文化圏の家族との比較を通して、我々が抱いている「家族神話」をひとつひとつ解体し、家族はどこにむかっているのかを議論している。

平成二二年度「誕生」したばかりのこのゼミも二期生を迎える、本年、平成二三年度は三・四年生の相互交流も含めてゼミスタイルを摸索中である。前期には「社会学的な視点」と共通テーマにそった文献リーディ

ングと討論を重ね、後期前半は、麗陵祭展示をめざしてリサーチが進む。本年の場合、三年生は前期の研究を発展させ、「少子化」の現状・原因・対策という展示を行った。四年生は、卒業研究の要旨を一人一枚の模造紙に展開するという卒論ポスター展示を試みた。近代家族「愛」の誕生から、家族とは対極にあるホームレスまで、テーマは多彩である。この体験は、三年生には研究方法だけでなく、文字・図表によるプレゼンテーションの工夫と卒業研究へのイメージ作りの機会に、また四年生にとっては、論文の骨子を確認する機会となつた。

後期後半は、三年生が卒業研究テーマについて個人

発表を行っている。卒業論文の草案が手元を離れた四年生たちは積極的に三年生ゼミに参加し、自分たちの

経験から様々なアドバイスをしている。この発表をベースに、二学期の終わりには三年生が卒業研究のテーマ・目的・方法をまとめ、「研究計画書」を提出する。就職活動が終わった段階ですぐ卒論に取り掛かれるペース作りである。

一方、四年生とは最終草案提出後にグループ（二～三人）面接を試みた。教員だけでなく、仲間との意見交換から論文を発展させてもらおうという意図である。進行が進むたグループにおいては、事前に論文を読み校正し合っているため、お互いの論文に対するコメントが飛び交い、充実した内容的議論ができた。一月後

半にはゼミ活動の締めくくりとして卒業研究・公開口頭発表を予定している。三年生が進行役とコメントターを務めるため、四年生も三年生の参考となるような論文をめざし、三年生もそこから論文の形式について学ぶという、世代間の知的刺激と学習相乗効果を期待している。公開発表となるこの初めての試みが、ど

のような成果をもたらすか楽しみである。

今後の課題は、これまで語学を中心できた学生たちが、いかに社会科学の見方と方法を学習していくか、また逆に、一・二年次に鍛えられたそれぞれの語学力と情報処理力をいかに活用して、その言語の背景にある家族、文化、社会に踏み込んでいけるか、ということだろう。これらの課題はゼミ内で解決できない部分もある。例えば他の共通・教養科目、学部を超えた社会科學の方法や社会学関連の授業との関連性を、一・二年次から明確にしていく必要があるだろう。さらによりていねいな卒論指導を実現するために、教員側にも卒業研究指導を正式な担当科目単位として認めてもらうことを、外国語学部に強く希望したい。

誕生したばかりであるものの、本ゼミは、ゼミ生も、そして教員自身も帰属意識が持てる知的刺激の場となっている。これも初代ゼミ長を始めとするメンバーの積極性と努力の賜物である。先輩もいない、ロールモデルもない、というハンディを彼らは見事に糧として、自発的にゼミ内連絡網を構築し、役割分担をし、麗陵



ゼミ合宿で1期生・2期生の絆を強める（2001年10月・研修寮）

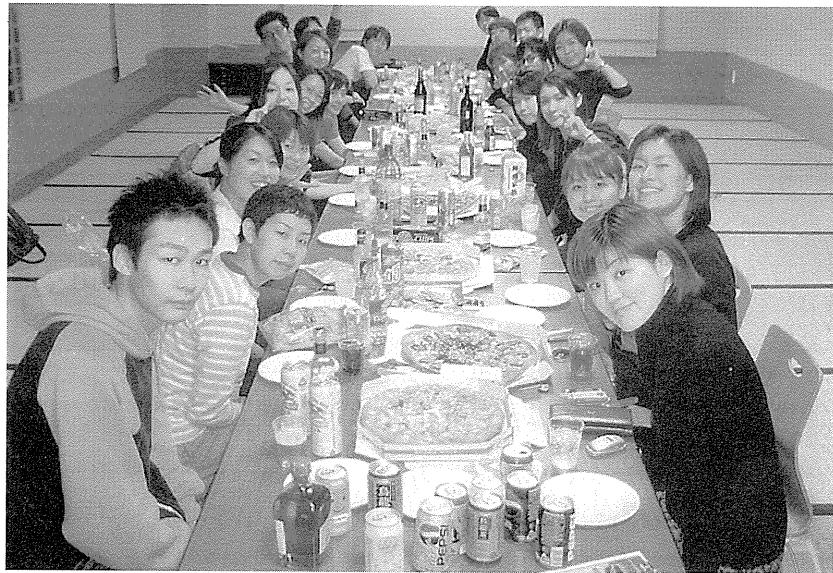
祭展示、ホームページの作成と管理、またマーリングリストの作成など、自由な発想で次々と進めてきた。これらのいわゆるゼミ内インフラ整備とチームワーク形成は、本ゼミの特徴として二期生に受け継がれていく。初代ゼミ生が成し遂げてくれた「伝統の創造」と初心を忘れずに、今後も皆が切磋琢磨しあえるゼミを、ゼミ生とともに育てていきたい。

### We are the Family

英語学科四年 平山 恵里子

「黒須ゼミ」という素晴らしいゼミと出会い、そしてその一員となれたことを、心から幸せだと思う。それは、ゼミを通して単に学術的な知識を得られたからだけでなく、それ以上に大切なものを学び、得ることができたからである。

ゼミ活動において基本となるのは授業である。このゼミでは、担当者の発表とディスカッションが中心だった。それまで、発表やディスカッションになじみが無



麗陵祭展示準備後の懇親会（2001年10月）

く、はじめは戸惑いや不安があった。しかし、周りのゼミ生の積極的な姿勢を目にしたり、彼らの意見に耳を傾けるうちに、いつの間にか私自身も、自分の考えや意見を伝えたいと思うようになつていった。自分の考えは、自分で声に出して言わなければ、他の人には伝わらない。そんな当たり前のことにも気付き、自己主張の重要さを学んだ。

また、自分の意見に対して、必ず周りが反応してくれる。たとえ自分とは異なる意見でも、自分の考えに固執することなく、その意見を素直に認め、受け入れることができる人たちなのだと思う。だからこそ、一緒にディスカッションをして意見を交換することを楽しむことができ、さらにそこから様々な考え方を得たり、新たな視点を身につけることができたのだと思う。そう、私がゼミで得た大切なものの一つは、この新たな視点だと思う。これを、あるゼミ生は「社会学的なものを見方」と言っていた。

私たちのゼミのテーマは、家族社会学、つまり社会学である。ところが、社会について研究するゼミに入

ろうというのに、それまで私はほとんど社会に目を向けてこなかつた。しかし、ゼミでいろいろな資料を読んだり、先生やゼミ生の話を聞くうちに、自然と社会に目が向くようになつていて。今まで、何気なく見聞きしていった周りで起きている事柄が、意味をもつものとして映るようになつてきたのだ。そして、私自身もそれらの事柄について考え、自分の意見を持つようになった。私の周りを取り巻く世界が、モノクロの世界から色のある世界に変わったような気がした。

ゼミ活動は、授業だけにとどまらない。学園祭の展示では、その準備として行つた合宿とともに、ゼミとしての連帯感・結束力が強まつた。みんなが一緒になって一つの目標に向かって動く中で、いつの間にかゼミメンバーも一つになつていたのだった。合宿での一体感とあの盛り上がりは、今思い出しても思わず笑みがこぼれてしまうくらい、いい思い出となつていて。また、このゼミの特徴の一つは、飲み会の多さだと思うが、その飲み会が、ゼミをまとめ、お互ひを理解するのに一役も二役もかつていたことは明らかである。

そして、このゼミの最大の特徴がホームページとメーリングリストであり、授業外でもゼミメンバーを一つにつなげる役割を果たしていた。こんな風に、授業だけの付き合いにとどまらず、さまざまな行事に参加したり、ホームページ上で情報を交換することによって、黒須ゼミは単なる一授業という枠を越えたものになつていたのだと思ふ。

この文章を書くにあたつて、ゼミ生と意見交換会のようなことを行つたのだが、そのとき、「黒須ゼミって家族みたいだよね」とあるゼミ生が言つた。その言葉で、「黒須ゼミ」という存在の大切さというか、存在の大きさがぴたりと表されていると思った。ゼミ活動を通して得た最大のものは、「家族」という言葉で表すことのできる「黒須ゼミ」の存在そのものかもしない。

## みがきの場としての梅田ゼミ

教 授

梅 田 徹

四学科共通Dコース（国際関係研究）



ゼミを担当するようになつて十二年になる。初期のころは試行錯誤の連続であつたことしか記憶にない。

私自身、学部時代、ゼミに学んだ経験がなく、ゼミをどのように運営していけばよいか戸惑っていたからである。当初は、自分の専門である国際法をテーマに掲げて、ゼミ生に取り組ませていた。国際法の講義を履修しているとはかぎらない学生たちにとっては、内容的におそらく難しかつたかもしれない。正直言つて、私自身もよくわかつていないのである。だから、当時、私のゼミに学んだ学生たちには、十分な指導ができず、申し訳なかつたという思いが今でもある。

ゼミのやり方について一つの型ができたのは、五、六年前のことであろうか。テーマも、国際法に限定せず、広く国際関係の話題を扱うようになった。「国際社会における法と政治の諸問題」なる看板を掲げているように、ゼミのテーマは多岐にわたる。たとえば、難民問題、民族紛争、集団安全保障、PKO、ODA、戦後補償の問題などである。国家とは何か、国益とは何か、国際社会の構造特性は何かという根本的な問題を考えさせることと、知識そのものを獲得するというよりも、むしろ対話を通して深く考えさせることが狙いである。おかげで、私自身も、学生の問題意識を掘り起こすような質問を次々に投げかけることがずいぶん

うまくなつた。

議論中心の授業をしていると、議論しつぱなしで終わってしまうことが少なくなつた。その反省から、ある年、毎回、一人レポーターを指名し、その週の議論の流れ、内容を要約させ、メールで私宛に送り、次の週に全員で確認するというやり方を採用した。また、発表者がいるときには、コメントーターを指名しておき、発表が終わると最初にコメントーターに発言させることにした。このやり方はなかなかよかつた。そのうち、議論好きの学生が集まるようになつた。他のゼミに所属していながら、毎週のように私のゼミに来て、鋭い意見を述べて他のゼミ生に良い刺激を与えてくれた輩もいた。そんな時代もあつたが、近年、少し傾向が変わってきたように思う。明確な問題意識を持つてわがゼミの門をたたく学生が減つてきてるのは残念な傾向だ。

毎年、夏にゼミ合宿を実施している。各地に行つたが、とりわけ思い出深いのは、宿泊費が無料だというので利用した国立赤城青年の家だ。九月上旬の上州、

冷房設備のない施設の中で、みな汗だくになつて議論をしたことは忘れない。四年前に一度だけ、春休み中にゼミ合宿を企画したことがある。網代温泉で一泊の合宿だった。ところが、その前日、妻が入院したため、私自身は参加できなかつた。それでも、ほとんどのゼミ生が参加して、学期はじめの懇親の場としてよい機会になつたと、学生たちが後で報告してくれた。その年のゼミ生はいつも以上にまとまりがあったのは、その合宿のおかげだつたのだろう。

夜の居酒屋での課外授業は、もっぱら学生たちが企画する。毎月のようにお呼びがかかつた年もあれば、学期に一度くらいで胃腸が休まつた年もあつた。そういうところでは、授業では見られない一面を見せてくる学生が一人や二人はいるものだ。おそらく私自身もそうであつたのかもしれない。そういう一面を見せ合つてこそ、教師と学生との眞の交流があるものだと正當化したくなる。たしかに教室では学べないことを学ぶ貴重な場である。

卒業生の数もかなりに上つた。そのうちゼミの同窓

会でも計画されれば、ぜひとも出席したいと思うが、今のところその話はまだないようだ。

## ゼミ活動を通して学んだ」と

英語学科四年 松田久美子

私達のゼミが実際扱う題材は、生活に密着しているとは言えないかもしませんが、日常、テレビのニュース番組などで耳にする話題です。最近の話題で言えば、アフガニスタンで起きている紛争や難民問題も研究テーマになりますし、地球環境問題、人権問題等も幅広く含まれます。

私達が最初に全体で議論したテーマは、日本の政府

開発援助（ODA）についてでした。多くの資金を使つて発展途上国に協力する日本、資金でしか協力できない日本、国民にはあまり知られていないODAの実態など、日本のことでありながら、全く知らない事実が多く、今までの自分がいかに無関心であったかということを思い知らされました。そして、日本が果たすべき役割について理解しなければ、世界を知るには不十分

分なのだという認識を持ちました。ODAについての学習を通じて、「独立国家としての日本」と「世界の中の日本」という視点を常に持つことが大切であり、そうした目が養われたような気がします。

ゼミ生各自の研究になると、題材の範囲はもとと広がります。日米安保や捕鯨、地球環境問題、核兵器、フェアトレードという特異な分野を研究した学生もあります。それぞれが研究発表し、他の学生に意見を求めます。国際的な問題の解決方法は、多くの場合複数あります。国際的な問題の解決方法は、多くの場合複数あります。国際的な問題の解決方法は、多くの場合複数あります。国際的な問題の解決方法は、多くの場合複数あります。国際的な問題の解決方法は、多くの場合複数あります。私は新しい意見に驚きや感動を感じた時は、自分自身に吸収するよう努力しました。

国際法の講義が平行して行われているため、ゼミでは基本的知識の詰め込みはしません。国際法的な議論が成り立つような事件や問題を適宜取り上げて、そこから「実践的な」国際法を学びました。国際法には、長年解決に至っていない問題や、今後なお発展しつつある分野もあります。国際法を学んだことで、私自身、様々に変化していく世界情勢に敏感になり、国際問題

のニュースに以前よりも興味を持つて接するようになりました。

そもそも私が数あるゼミの中で「このゼミで学びたい！」と感じたのは、もちろん先生のお人柄やゼミの



あじろ  
網代温泉でゼミ合宿（1996年9月）

霧雨気なども理由の一つではありましたが、大学に入学した当初の、語学だけに対する私の関心が、次第に語学を使って国際関係の知識を得るという新しい方向に変わってきたからでした。そして「世界各国が平和に共存していくためのルール」を体系化した国際法という学問に初めて出会い、これに強い関心を抱くようになりました。

その頃の私の国際法に対する問題意識は、非常に漠然としたものでしたが、その後それを絞り込み、四年生になった今、私は「国際刑事裁判所」という国際的な司法制度について卒業論文をまとめることに決めました。裁判所とは言え、様々な理由でまだ機能してはいませんし、問題も山積している発展途上の分野と言えるでしょう。この研究に取り組むきっかけは、梅田教授が昨年、判事として参加された国際法模擬裁判を傍聴し、国際裁判というものに強い関心を持ったことです。きっかけを与えて下さった先生には、非常に感謝しております。

私が将来、どのような形で国際法と関わっていくか

はまだわかりません。しかし、自分の中にある国際法を学ぼうとする気持ちだけは、失わないよう…と思つています。

## 梅田ゼミの思い出

(中国語学科・平成一〇年卒・五七期) 星野さおり

一九九六年九月、われわれ梅田ゼミの三年生十数名はゼミ合宿のため、海の見える旅館で初めて全員集合した。

三年生の前期の間、留学に行つていた私を含む数名にとっては、初めての「ゼミ活動」であった。そのときの私は、台湾留学とそれに続けてのアメリカ遊学から帰ってきたばかりで、脳味噌が氣化していて、世界情勢に対する関心がうっすらとあるような気がしていただけだった。合宿の事前準備のため、当時なぜか関心のあつた北朝鮮関係の本を読んだり、ディベートで扱う日米安保について図書館に行って調べたりして、いちおう体裁だけは整えようとしていた。おそらく参加した三年生の大半は、留学から帰ってきたばかりで、

その時持ち合っていた関心は、外国語であるか留学先で学んだことに対しても向いていたのではなかつたのか。というわけで、私もちやらんぽらんなまま合宿に臨んでしまつた。ただ、他のゼミ生の多くも同じようなレベルで臨んだようで、それほど自分が「能天氣」だと痛感せずにすんだ。

ところが、合宿中聞いた話や収集した情報、ディベート等は新鮮で、新たな学習意欲をかき立てられた。いつまでも脳味噌をブカブカさせていてはいかんという思いを痛烈に感じた。特にディベートは私にとっては初めての経験ではあったが、その白熱ぶりに感動をおぼえた。テレビの「日曜討論」のような、相手の存在すら無視するスタイルとは全く異なり、きちんと互いに聞きあい話し合うという意見や考證のぶつかり合いは、非常に刺激的であった。

三年後期の授業が始まると、各個人の発表形式のゼミがスタートした。見事に皆、関心事がばらばらで、本音を言えれば、なぜそんな国、文化、事件に興味を持っているのか、理解に苦しむような発表もあった。当時の

私にとって新聞は読まなければならないものであり、読みたいものではなかった。何とか国際面を読むようになっていたが、相当な忍耐をしつつ、必要に迫られて読んでいたありさまだった。経済面、政治面は読むだけ



授業終了後に。2列め右端が星野さん（1996年12月）

け無駄と勝手に決めつけて読まなかつた。そんな私が梅田ゼミで落ちこぼれずには、今になって思えば、知っている振りをし続けた演技力が功を奏したのか、あるいは梅田先生が「ほとけ様」であつたかの、どちらかではなかつたのか。

梅田ゼミでは新聞をきちんと読み、世界情勢や文化、歴史等に興味を持つて参加すれば、皆の発表を聞くことにより、さらに広く深い情報、知識が得られる。そんな内容盛り沢山の「お得な」ゼミであつたように思う。今、かりにまた参加できるのであれば、当時の自分よりも数倍知的好奇心をそそられ、大きな収穫が得られるであろう。

現在、私は空気圧総合機器メーカーのSMC株式会社の輸出部に所属しており、海外営業のサポート業務に従事している。海外からお客様が来日した際は、接待にもお付き合いする。そのような場で、相手の国の社会情勢や文化について、切れ端の知識でも口にする場が盛り上がる。常に関心を持とうと心がけていて良かった、そう思う瞬間がよくある。（SMC（㈱）輸出部）

## 「マクロ経済理論と政策」

教授 成なり  
国際経済学部 専門演習（経済）  
相あい修



国際経済学部における専門演習をいかに位置付けるかは、学部創設一〇年を経た今日でも大きな課題である。私の演習での経験と反省をもとに、今後の専門演習のあり方を探ってみたい。自分が大学時代に受けた演習の経験では、国際貿易理論などのテーマに関する標準的な論文集である Readings の掲載論文を輪読していくという手法であった。専門知識は各自が他の多くの書物や論文で補充しながら、分野では不可欠な論文と格闘し、理解し、実証分析の楽しさなどを味わった。内容の理解が伴わず、ゼミ発表が苦渋に満ちたものになったこともあり、先生からの問い合わせに満足な回答ができずに屈辱感を味わうこともあった。

こうした原体験に基づいて、わが学部のゼミ生に対しても、知的興奮と屈辱を共有できるゼミにしたいと考えた。一期生には参考文献を数冊指定し、それらを読んだ上で、テーマごとに報告させるスタイルをとった。全く精粗まちまちであり、当初の狙いは成功しなかつた。この方式は、基礎力と全員の高い参加意欲が前提であったからである。

二期生からは、欧米の大学でもっとも標準的とされるマクロ経済学のテキストを精読するようにした。しかも、各自が毎週数頁を担当するようにさせた。効果はあがつた。もちろん全員が満足できるレベルにまで至っていないが、毎年国立や著名な私立の大学院に

合格者を出すに至った。このときには、ゼミの前夜は何人かが研究室で徹夜をするというのが恒例となつた。三年生の専門演習といつても、足腰がしっかりとしない学生が大部分であった。こうした状況では、基礎力をしっかりと叩き込むことが、次のレベルで政策論を論ずるうえで不可欠であった。

三年次のこうした基礎をもとに、四年次では各自の論文作成に入った。学生は論文作成という、ついつい大きなことを考える。しかし、一見無味乾燥のように見えるテキストを精読する中に、基礎力をつけつつ、論文のネタは山のように存在する。ところが、それに気付かない学生が多い。データを集め、こつこつ実証分析するという地道さが報われるはずである。

ゼミを演習として位置付けると、基礎力を試す練習問題を解くことに主眼を置くという考えもある。正しい。理想的なゼミを構築する以前にこうした基礎的な演習をおこなって、足腰を強化することも必要である。この上にたって、論文に挑むことが理想であろう。

平成一四年度には、新しいカリキュラムに向かって

大規模な改正作業が行われる。この中で、国際経済学部におけるゼミあるいは演習の役割を、抜本的に見直したい。しかし、教員と学生との「知的バトルの場」であり、かつ「信頼醸成の場」であるゼミを生かすも殺すも、学生の心がけと努力次第である。

学部創設時の篤い志に立ち返って、ゼミのもつ「重さ」、「厳しさ」そして「楽しさ」に、多くの人が接することを期待したい。

### 成相ゼミで学んで思うこと

国際経済学科三年 山本 晋也

今まで大学で「経済」という学問を学んできました  
が、前々から思っていたことが一つありました。経済  
というものは、その実体を理解していくことで、景気  
がいいときは盛り上がり上がっていますが、大不況のなかで  
は対処すべき薬があるわけではなく、今の世の中をみ  
てみると「なかなか難しそうだな…」と、感じていま  
した。

三年生になり、私はゼミで経済というものの理解を深めてみたいという意志から、成相先生のゼミに参加しています。

為替相場はなぜ毎日どのような理由で変わるのが、日本は外国の債権を大量に保有しているはずなのに、なぜ国債の発行をし続け借金大国になってしまったのか、有名な経済学者の理論は果たして何の役に立つのか、などの疑問は、経済についての知識が浅かった一、二年生の頃では（今もですが…）自分のなかで納得のいく回答は出せませんでした。もちろん授業には参加していたのですが、どの授業も私の経済に対する不透明感を拭い去ってくれませんでした。

ゼミでの勉強は、経済の知識における足腰を鍛える

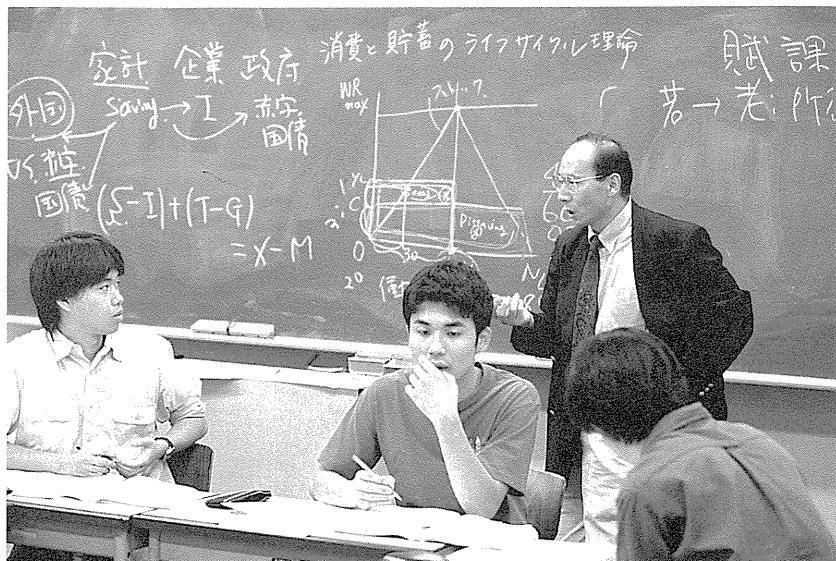
ことを目的とし、欧米の大学の経済学部で一般的に使用されているマクロ経済学の教科書を読みこなすことから始まりました。毎週自分の範囲の英文を訳し、内容を理解した上でレジメを作り発表する、と書いてしまふと簡単そうなのですが、専門的な単語が多く、和英辞書、経済辞書、マクロ経済の教科書、レジメを作るためのパソコンと、どれが抜けてもまともな発表が

できなくなってしまうため、完成するまでは悪戦苦闘

が続きます。

ゼミの勉強から学ぶことは、それまで勉強していたものよりも実践的であり、私の中での経済に対する疑問が、それなりの理論の結果によるものである、と理解できました。これまで不十分であった理解が、初めて経済学を学ぶ達成感に変わり、世の中の動きを深く理解する良いきっかけとなりました。また経済に限らず、学ぶことにおいても、単に理解するだけではなく、そこからインプット（知識・知恵）、さらにはアウトプット（結果）へとつなげるプロセスの重要性に気が付きました。

今は卒業論文のテーマを模索中です。理想としてはこれまでに勉強したマクロ経済の知識から、自分にできる最高の結果を残すことが目標です。これまでに勉強した内容から、先生はさまざまな問題提起をしてくれました。広い視野で学んだ経済を、次はテーマを一点に絞り、動きつづける世界についての理解を深めていきたいと思います。



白熱する成相ゼミ（1999年）

*“Happy Birthday Kayamori-san!”*

(国際経済学科・平成二二年卒・五九期) 萱森 かやもり

実

平成一三年一〇月一〇日(土)、マレーシアの首都クアラルンプールにて、中央アジア・コーカサス諸国支援に関する国際会議の最終日、私は開催側スタッフの一人として会場にいた。会場には各国を代表する著名な研究者や政治家が多数出席しており、Chairmanは会議の成功を賞賛し最後のスピーチを締め括ろうとしていた。しかし、最後に彼の口から出た言葉は、私の誕生日祝いだった。その日、私は二四歳の誕生日を迎えていた。初めての海外出張と会議開催で、誕生日のことなど考える暇もなかつたというのに、会議のクライマックスで満場の拍手と共に自分が登場していた。麗澤大学を卒業した当初、コンビニの深夜バイトをやりながら考えた自分のごく近い未来は、大学院受験を念頭に置きながらも、とりあえず失業者だった。しかし、幸運にも、このようなやりがいのある仕事を就いていられるのは、麗澤大学に入った事に尽きる。

麗澤大学国際経済学部に入學し、四年間の学生生活

を送る中で、時間的にも質的にも大きな意味合いを占めたのは、成相ゼミにいた事だった。それは一つに、自由な議論を真剣に出来る場であつたからのように思う。成相修先生が主宰する「成相ゼミ」は、マクロ経済学の理論の基礎を学ぶゼミである。最初の一年目は、英語の分厚い経済学の本を一冊入念に読むことに終りし、四年生になると日本経済に関するテキストを皆で読む傍ら、各自卒業論文を書き始めた。一つの理論を深めていくばかりではなく、最新の経済学の論争から現実の経済と理論のギャップに目を向けるなど、学生を色々な角度から刺激してくれるゼミであった。もちろんその刺激に反応することも要求される。ゼミの後には、先生と学生の自由な議論を促進するために、よく研究室で手製の焼きそばや餃子を食べながら、分野を問わない議論を展開していた。

平成一二年二月、卒業を間近に控え、最後の春休みを使って就職活動をしようかと思い始めていた。なぜなら、授業を休むのが我慢ならず、就職セミナーには三回しか参加しなかつたため、卒業後のことは何も決

まっていなかつたのだ。そんな矢先、成相先生が笹川平和財団より請け負つたウズベキスタン訪日団の受け入れをお手伝いした。私の仕事はコンピューターによる滞在プログラムの作成や滞在中の世話係であつた。幸い私は彼らに好意的に受け入れられ、毎夜ウオッカを飲もうと誘われたものである。さらに幸運なことに、その時の仕事ぶりが財団の事業担当者に気に入られ、笹川平和財団にその年の四月から入ることになつた。就職セミナーの一次試験を一度もパスしたことがない私にとって、まさにウズベキスタン訪日団受け入れこそが就職試験だったのである。

しかし、財団に入った当初は、週二日行くに過ぎず、空いた日はコンビニで深夜のバイトをしていたため、定義上は失業者という空虚な気分も味わつていた。二ヶ月が過ぎた頃、財団の仕事が忙しくなってきたので毎日行くこととなり、平成一三年四月からは正式な職員として毎日勤務している。主に中央アジア・コーカサス地域や東南アジアの発展途上国を支援する事業に携わっている。成相ゼミで先生と議論した事柄が、実



成相研究室で懇親パーティー（1999年12月）

際に国際会議などで大きな問題として取り上げられている現場を目の当たりにし、成相ゼミでの議論が今の自分にとって大きな土台になっていることを感じた。今後事業を開発運営していくためには、大学院修士課程以上の知識が求められる。次の課題は専門知識をつけるために大学院に行くことである。大きな飛躍を果たすためには、理論、分析、実証と学ぶべきことは多い。初志を貫徹するべく高まっていくことを目指す。

（ 笹川平和財団勤務）

## 私のゼミ指導のねらいと課題

教授 永井四郎

国際経済学部 専門演習（経済）



私の担当するゼミは理論経済学に属しており、どちらかというと学生諸君が避けたがる分野である。ゼミ学習の基礎となる講義科目「現代経済理論Ⅱ（ミクロ）」も、数学を用いた抽象的な思考を要する内容である。したがって私のゼミは、抽象的な思考に拒否反応を示す学生には不向きである。

私のゼミ指導のねらいとするところは次の二点である。

(一) 経済学的思考の基礎となる理論を学ぶ。  
(二) 基礎理論を現実の経済問題に適用する。

具体的テーマは「情報の経済学」である。まずシステムや情報といった平素聞き慣れた用語の正確な概念

把握から始めて、技術とは何か、経済システムにおいてそれはどのような意味を有するかという問題を考える。さらに技術の波及と企業による技術革新活動をめぐる問題に議論を展開する。ここで重要なことは、ゼミ生各人がパレート効率性概念を明確に理解することである。毎年恒例となっている二泊三日のゼミ合宿で、午前一時・二時まで時を費やすのは、パレート効率性基準の学習が原因となることが多い。これは「経済はどうあるべきか」という規範的分析を試みる場合に、欠かすことのできない知識である。

およそいかなる分野にあっても「どうあるべきか」を問う場合には、何らかの価値判断をともなわなければ

ばならない。パレート効率性は、経済学にとって唯一の価値判断基準なのである。「社会のあるメンバーの厚生を高めようとすると、必然的に他のメンバーの厚生を低めざるをえない状態」はパレート効率性を満たすが、その背後には「すべての個人は、経済的厚生を平等に享受する権利を持つ」という明確な価値観が存在していることを忘れてはならない。

私のゼミ指導の真のねらいは、上述のような学習を通して、自らの目で見た現実世界を認識し、それについて論じ、何らかの見解を提示できる学生を送り出すことである。しかしながら、実際にはその目標がどこまで達成されているかは疑問である。私の指導力の不足振りを自覚し、反省するばかりである。

ゼミの進行は、予め定められた担当範囲について、各人がレジュメを作つて報告するという形式でなされる。したがつて十分な準備がされているかどうかが当日露骨にされる。ある区切りのところまで報告がなされた後、私が内容をまとめ、全員の理解を促す。報告者以外のゼミ生にも後日レポートが課されるので、全

員が毎回の報告内容について理解しなければならない。

こうした日頃のゼミ指導において痛感することは、ゼミ学習の基礎となる「現代経済理論」の習得がきわめて不十分であるという点である。例えば競争的市場で一企業が新しい生産物の製法技術を開発したとき、当該企業はその生産物の市場において独占または独占的競争の状況に直面するのであるが、独占や独占的競争のモデルが学生の知的ストックからすっかり抜け落ちているため、議論が先に進まないのである。この種の問題は、経済理論に関わるゼミ指導において、日本その他大学さらにアメリカの大学においても担当教員を困惑させているようである。ただし幸いなことに、こうした場合、今度こそしっかりと理解しようという強い姿勢がほとんどの学生にうかがわれることである。

何のためにこんな抽象的な勉強をするのか、それが将来どんな意味を持ちうるか、授業の折々に学生に語りかけるようにしている。一言でいえば、それは前述した私のゼミ指導の真のねらいに関わつてくるが、他方で論理的な思考の積み重ねの訓練は、様々な問題に

対処する上で判断の助けになるということである。ゼミ指導で私のできる範囲は、せいぜいそこまでである。あとは合宿や日頃の授業を通して形成されるであろう私のイメージを抱いて彼らは本学を巣立つて行くのであるが、むしろそこに、私は一教師としての責任を覚えるのである。

### ゼミ活動を通して学んだこと

国際経済学科四年 吉見 千聰

私がゼミ活動を通して学んだことは、ゼミの講義内容である現代経済理論と、その学び方、考え方、伝え方、そしてそれらを生かすための積極性である。

履修要綱で見た「現代経済理論の基礎的的理解を深めるとともに、その応用として、現代経済のいくつかの問題を理論的視点から研究し、討論を通してその認識を高めることとする」という講義内容にひかりて、永井ゼミに入りたいと思った。学んだことについて自分の考えや意見を討論の場で発表できるようになりたいと思っていたからである。

経済学の概要を学んでいた一・二年次の頃と比べて、少人数制で行うゼミ活動を通して、「経済」というものを身近に感じられるようになった。これまであまり気に留めなかつたことも、ニュースを見ても自然とうなづくようになつた。

ゼミ活動は、とてもやりがいがある。三年生でのゼミ活動は、報告とディスカッションによって、卒論研究の基礎となる知識や分析手法を学んだ。あらかじめ指定した報告者がテキストの担当部分の内容を要約し、文献や資料調査をもとにした報告で授業が進められた。四年生では、報告内容を自分の卒論研究に切り替え、隔週で半数ずつ報告をしている。他のゼミ生の卒論報告を聞き、卒論テーマは異なるが、同じゼミで学んできたことを生かした内容であることが共感でき、研究のよい刺激になつている。

夏の二泊三日ゼミ合宿では、普段の講義一〇回分以上を消化し、苦しんだ時もあったが、そのあとみんなでする食事はものすごく楽しいものだった。今まで二回ほど食事会が開催され、先生とゼミ生、ゼミ生同士

が、よい人間関係をつくることができた。ひとつのグ

ループ内での人間関係の大切さを知ることができた。

そして、ゼミの初期には、永井先生からの発問があると、教科書を見たり、なかなか答えることができなかつたりましたが、卒論報告では、適切に自分の言葉で答



伊豆・修善寺でのゼミ合宿（2000年8月）

えることができるようになっていた。

四年生になり、母校の高校で教育実習をした時、進路について話すことになり、経験をもとに話した。高校の先生は「吉見さんがここまで話せるとは思わなかつた。大学へ行って成長したわね」と言ってくださいました。確かに高校時代の私は、成績の面では努力していたものの、情報収集、発表、意見をまとめたりすることに関して、あまり積極的なほうではなかつたように思う。自ら情報収集して考え、それを自分の表現でわかりやすく発表することは、今ではあたり前のようにゼミ活動に取り入れられているが、その「あたり前」は、実は成長していた部分だと実感した。

私は教員になるのが夢で、教育職員免許状取得のための単位を履修してきた。そこで、私は経済発展の基盤は教育であると考えているので、卒論テーマを『経済と教育』にして、研究に取り組んでいる。このように私はゼミ活動で、現代経済理論と、情報収集・分析手法・プレゼンテーションを通して得た学び方、考え方、そしてそれらを生かすために自分から行動を起こ

そういう積極性を学んだ。

教員採用試験に中学社会科で合格し、教員への道が開けた。新しい学習指導要領に、自ら学び、自ら考え、問題解決する力を身に付け、生きる力を育むことを目指した内容が盛り込まれたことで、教員という職業は、私がゼミ活動を通して学んだこととその成果を充分に発揮できる場であることを確信した。将来、これらの力を生かし、より高めて、確かなものにしていきたい。

## ゼミ教育で学んだ事

(国際経済学科・平成八年卒・五五期) 川瀬 達也

希望に胸膨らませて大学キャンパスを巣立つたあの日には、再びこのキャンパスに通う事になるとは思つてもいなかつた。麗澤大学が第三の故郷（第二は麗澤瑞浪高校）で、麗澤に誇りを感じている私は、このようない縁に感謝したい。平成二三年九月一日より母校の就職部で、学生の就職活動のお手伝いをさせて頂いている。

数年ぶりにこの通いなれたキャンパスを歩いている

と、学生当時の楽しい思い出が昨日の事のように甦る。そんな楽しい思い出の一つに『友』、そして、その友達と共に何よりも打ち込んだ『大学祭』。そしてもう一つは、麗澤大学での学びを通して出逢った『恩師』である。中でも、卒論研究でお世話をなつた永井教授

を語らずにはいられない。

入学当初、経済に興味はあるが、授業が難しい…。必死に図書館で勉強したものだ。さらに、必修の英語経済書講読では「解からない経済を、できない英語でやるなんて」と頭を悩ませていたが、そこで出逢つたのが永井教授！とにかく具体的に噛み碎いた説明が解かり易く、僕の勉強意欲に火を灯してくれた。経済学にある程度の力をつけた（英語はまるでダメ）私は、三年のゼミ研究で、迷わず永井教授を訪ねた。ゼミの課題は経済理論研究で、私はハロッド・ドーマーの経済理論について、永井教授の指導をいただきながら、経済理論の分析力を磨いた。

永井教授から学び、自分を形成しているものがある。見る眼である。理論的な立場から経済を様々な切り口

で分析するが、教授はその見方で人生に対しても同じ

様に分析する事を教えてくれた。「理論は、そんなに難しく考えるのではなく、ほら、自分の身近なものにたとえて…」というように、いろんな見方を教わった。



永井ゼミ1期生のゼミ合宿（1995年8月・沼津）

経済と理論は、人生と哲学に対応する。

生きるという事は、自分を常に磨く事。人生・仕事・遊び、何でも目標（なりたい自分・実現したい事）を明確にし、目標達成のために現実の自分（実力・足りないモノ）を知り、達成までの道筋をいくつも明確に描く。そして行動・チェック。人生・社会は、これの繰り返しだと思う。その繰り返しの中でどれだけ自分が多くの事を学べるかで、大きく変わるだろう。こんな哲学を学んだ。

「ゼミで学んだ事」、それは経済の事だけではない。永井教授の人柄から、温かさや、優しさを学んだ。何の用が無くても研究室に足を運んだ。珈琲を飲みながら様々な話をした。いつでも快く教えてくれる。なんとも温かい。無邪気に遊んだゼミ合宿。社会に出てからも、ゼミの仲間が支えになってくれている。よき相談相手、よき理解者。上手くゼミのすべては語れないが、社会に出てから気付く事は多い。ゼミで学んだ多くの事が支えになり、明日の活力になる。

（麗澤大学就職部勤務）

## 佐藤ゼミの八年

教授 佐藤政則  
国際経済学部 専門演習（経営）



私が麗澤大学に着任したのは、国際経済学部が発足する一年前、平成二（一九九一）年四月であった。もう一〇年も前である。まだ研究B棟ができておらず、完成する夏頃まで西銳夫先生と同室で研究A棟に居たわけで、外国語学部に籍があった。一学期はかなり自由な時間がもらえたが、二学期に入ると、国際経済学部の開設に向けた準備が大詰めとなり、小松雅雄先生（初代国際経済学部長、現在、廣池学園顧問）を頭に、

繁忙な日々が続いた。準備作業に関わった教員、事務方すべての人達が、（当然だが）今よりもみんな若くて、なにより熱く、激しかった。八時間近い会議というのもあった。心のひだに染み透るような心配りがあつた。他方で罵倒、怒鳴り合いもあつた。国際経済学部を立派に立ち上げようと、みんな懸命だった。平成四（一九九二）年四月に国際経済学部が発足し、一期生が入学した。この学生達を目にしたとき、泣きたいほど嬉しかった。

この一期生のうち、十五名が私のゼミに入ってきた。平成六（一九九四）年四月である。それから毎年、新しいゼミ生が生まれており、平成二三年度の三年生、二七名が八期生になる。平成一一（一九九九）年から

数年前まで圧倒的に男子学生が多く、「男くさい」

ゼミだったが、今では完全に逆転している。女子学生のもつ真面目で、明るく、賑やかで華やかな雰囲気が日常になった。ゼミの運営は、一期生の頃からゼミ長、サブゼミ長、会計を中心とした学生の自主性に委ねているが、歴代ともうまい運営をしている。

私の専門が経営史や経済史なので、ゼミでは日本とアメリカの企業史や企業者史を学ぶことになる。できるだけ多くのケースをとりあげるようにしている。そのなかで自分の関心の所在を見つけてくれればいいと考えている。

特別なことをしているわけではないが、ゼミ生達と過ごす時間は、可能な限りとっている。週一回のゼミの他に、夏合宿・春合宿を行い、場合によっては四年生向けの秋合宿を行う。合宿は、四期生の頃からバスを借り切って行くことになった。今では、二年、三年、四年が揃って参加する夏合宿が大変だ。今年（平成一三年）は、総勢六〇名ほどになり、ゼミ長や合宿担当者は苦労したと思う。

ゼミが終わって夜の闇に繰り出す「夜ゼミ」という

怪しげな時間も、とくに大事にしている。柏の「ここじゃ」、南柏の「白木屋」がお馴染みである。その日の反省なども出るし、プライベートなことも話題になる。

この他いくつかの恒例・定例のイベントがあるが、なかでも卒業式当日に行う「ゼミの卒業式」というのを一期生の卒業から続けている。当初は、私の自宅でゼミ生以外も集めて私が行つたが、すぐに現役生達が万事進めてくれるようになった。何があつてもこれだけは続けていきたい。

昨年度（平成一二年度）からゼミ制度も大きく変わり、二年生の二学期から、学科を問わず履修できるようになった。様々な出会いが増えて大変喜んでいる。

私のゼミに入った学生は、しばらくすると、みんな素直な雰囲気に変わる。これが何故なのかは、今でもわからない。とにかく一人一人を大切にしたい。そして、社会との繋がりを考えながら、自分自身を発見してくればいいと思っている。

## 佐藤ゼミで学んだこと

国際経済学科三年 金子 恵梨

通常、ゼミというのは、二年生のときに専門演習Iを履修して、大体の人が三年生になつてもそのゼミを継続するという形を取るものですが、私は二年生のとき専門演習Iを履修しませんでした。佐藤ゼミに入ろうと決めたのも、正直なところ面接期間がギリギリに迫ってきて焦っていたのと、比較的人気のある佐藤ゼミに入っておけば大丈夫だろうという、根拠のない安心感が入り混じつてのことでした。

ゼミの内容は、日本や海外の身近な企業（主に情報産業のハードメーカー・ソフトメーカー・自動車メーカー・小売企業）の歴史や経営管理・経営組織について書いてある教科書を、章ごとにグループでまとめて報告し、みんなで質疑応答をするというものです。私が大学に入学してから二年間、聞いているか聞いていないか分からぬ人達の前で一方的に発表することはあっても、自分の発表に対して質問され、その質問に

対して相手が納得できるように答えるなどということは、一度もしたこと�이ありませんでした。初めはどうして良いのか分からず、ただ黙つてみんなの様子を窺うかがうだけでした。半年間のブランクというのはやはり大きなもので、二年生からゼミに入っている人は次々に質問し、それに対しても答えていました。

最近になってようやくこの授業形式に慣れてきて、自分の思っていることを質問したり、答えたりできるようになりました。私は、このゼミで、「出席する」のではなく「参加する」のだという事を学んだのだと思います。もちろん授業の内容についても学ぶことはたくさんあるのですが、私は前者を学んだことの方が意味があるような気がします。報告を聞いて内容を考え、自分が疑問に思ったこと、理解できなかつたことを挙手して質問する。当たり前のことですがあれそれがいかに大切なことか、ゼミに入つて実感しました。

佐藤ゼミで私が得たものは、それだけではあります。【先生と学生】【学生と学生】【先輩と後輩】の繋



新潟・村上市で夏合宿（2000年8月）

がりです。二年間、サークルやクラブに入らず、なんとなく大学生活を送ってきた私にとって、ゼミの仲間は、今ではとても大切なものになりました。五时限のゼミが終わってから、毎回というわけではありませんが、でも大抵は「夜ゼミ」というものがあります。みんなでご飯を食べたりお酒を飲んだりして、お互いのコミュニケーションをはかる場です。夜ゼミは、就職活動中の四年生の心のより所でもあると思います。就職活動はどんなものか、辛かったこと、良かったこと、そんな事を私たちや先生に話して、また就職活動に励んでいるようです。

OBの方々や四年生を見ていると、佐藤先生やこのゼミや、ゼミの仲間たちを本当に大切にして、一生の宝としているような気がします。私も、このゼミで他の授業では学べないものを学び、大切な仲間ができたことを、とても嬉しく思います。そして、このゼミでの事が、大学生活の一番の思い出になつてゆくと思します。

## ゼミ活動を通じて学んだ事

佐藤ゼミ三期生

(国際経営学科・平成一〇年卒・五七期) 出繩 英之

「このゼミは男ゼミである」。最初のゼミ行事であった合宿で、私が唯一記憶している佐藤教授の言葉である。今日の社会ではセクハラでしかないそんな言葉を、当時私は「男女の人数比の事だろう」程度に捉えていた。教授の口から「男ゼミ」という言葉を、その日から今日迄に何度も聞く訳だが、聞く度に私はその認識を新たにさせられた。

ゼミの内容は日本経営史とアメリカ経営史の比較で、三年時の全体テーマが「自動車」で、四年時が「パソコン」であった。経営史というと本当に幅が広く、それこそなんでも有りの世界だろう。そんな中、ゼミ全体で取り組むテーマに前述の二者が挙げられたのは、様々なジャンルに関わる業種を掘り下げる事によって知識のベースを築くのに非常に役に立った。ベース知識を学び、得た知識から興味が喚起され、次の知識への研究に移る(卒論)。こうして「個人の意見を持つ」

という事が、社会に出て役に立つ事なのだろうと感じる。考える習慣・学ぶ習慣・意見交換をする習慣、こうした社会人としての基本事項への導入として、ゼミは重要な要素を持っていて。

ゼミの場というのはキャッチボールの応酬である。質疑応答・意見交換は勿論の事、教授からの理解・期待。これに応えようとするゼミ生の努力(大なり小なり)。そんな教授からのボールに敏感な人間が、佐藤ゼミには集まっていた様に感じる。まあゼミの場に限らず、人が集まればそんなキャッチボールが繰り返されているのだろうが、硬球を思い切り投げ合えるゼミは良いゼミではなかろうか。少なくとも私が在学中、ゼミ生がどれだけ応えたかは別として、そうした目に見えないボールを教授はたくさん投げて下さった。そして今でも、ご家族を交え、私と話す機会を持つて下さる。私の人生における大きな財産である。

卒業してもうじき四年になるが、同期のゼミ生達との交流も相変わらずである。特に友人の事となると、ゼミと他の大学生活を分けるのも困難であるが、彼ら

もまた、学生時代に得た知識・経験よりも大きな私の生涯の財産である。元々講義外でしか目立たない人間を教授が拾って下さったようなメンバーがゼミの友人達なので、社会人になったからといって経済の話し



1998年3月、佐藤ゼミ3期生の「ゼミの卒業式」(佐藤先生宅で)

などは殆ど出て来ない。しかし互いに近況を報告していると、皆意外な程大人になっているし、何より幸せそうだ。当然それぞれ苦労や困難が有り、時には愚痴も出る訳だが、一様に前向きである。我々は切磋琢磨するような緊張感溢れる仲ではない。しかし、口に出さなくても互いへの理解や期待を感じられる。まだ帰るには早いが、今迄もこれからも、何度も立ち寄るであろう私の原点である。

さて、多少話しが逸れてきたが、少しは伝わったであろうか。冒頭に記述した「男ゼミ」の正体が。そう、これだけ熱く心のやり取りをしているのに、一つも恋が生まれてこない。これは恐らく性別は一種類。更に、熱い教授からの豪速球を打ち返せると見込まれて入ゼミするゼミ生。ある意味、男氣が溢れているに違いない。佐藤教授にお世話をになってもうじき八年。教授がよく口にされる「男ゼミ」を、私は現在このように理解している。色々書いてみたが、私がゼミ活動を通じて学んだ事は、すごく基本的な事だと思う。今後の人生に大いに役立つ、大切な基本である。

## 高ゼミ紹介

—自己の可能性に気づき、それを引き出す—

教授 高 嶽

国際経済学部 専門演習（経営）



高ゼミが目指すもの。それは「学生諸君が自己の可能性に気づき、これを自らの努力で引き出していくこと」です。「こんな格好いいこと言つても、そう簡単

に自分の可能性に気づくものではない」。皆、そんな風に言うでしょう。ただ、私は、懸命にそして誠実に大学生活を送ろうとしている学生には、それができると感じています。

大学生活がいかに貴重であるか、いかに短い青春時代であるかを知れば、学生は四年間という凝縮された時間大切に生きようとするからです。

ただ漫然と時間を過ごす者。与えられた課題を誤魔化す者。他人や社会ばかりを批判する者。おそらく、そうした学生には、自分をここまで育ててくれた人、毎年毎年文句も言わず学費を納めてくれている両親の苦労など、全く眼中にはないのでしょうね。自分の学生活を支えてくれる友人、先輩、後輩の有り難さも、ただの雑音に過ぎないはずです。

ところが逆に、与えられた学生生活に喜びを感じ、何事にも懸命に取り組もうとする学生は、知らずしらず

ずのうちに自分の可能性に気づき、また周囲に好影響を与える、自らも成長してゆくはずです。なぜなら「この大学生活は人生において一度しかない、やり直しがきかない」ということをよく心得ていいからです。

私のゼミでは「企業と社会」をテーマとして授業を進めていますが、それはただの看板であって、授業内容は学生たちの主体性によって決まります。学生諸君が時々のテーマを選び、これを議論するわけです。

たとえば、特殊法人改革、年金制度、企業の危機管理、不良債権問題、環境報告書、WTO、社会責任投資などが、ここ一、二ヶ月のテーマでした。もつとも、私自身が「企業倫理」や「コンプライアンス」という分野を研究しているためか、学生たちもそうしたテーマを選ぶ傾向にあります。テーマの選択は基本的に学生諸君の自由です。

ゼミは二年の後半から始まりますが、一年から四年までが一緒になって議論するのが、高ゼミの特徴です。私が語るよりも、先輩に語つてもらう方が説得力があるため、私はできるだけ口を挟まないようにしていま

す（実際はしゃべり過ぎのようですが）。特に強調したいのは、先輩たちの勉学に励む真摯な態度です。教室で、私が「勉強しなさい」と説教するよりも、彼らの後ろ姿は後輩たちに多くを語ってくれるからです。

この他、ゼミでは、学生諸君が工夫をこらし、色々な最新ツールを駆使して発表を行います。またその方法を先輩から後輩へと伝授しているようです。私が学生でないため、彼らから私はなかなか教えてもらえない。そのため、ツールを使いこなすということに関して一番遅れているのは私となってています。

「懸命にそして誠実に大学生活を送ろうとする学生は、自己の可能性に気づき、これを自らの努力で引き出していく」。高ゼミが目指すものとしてこの点に触れましたが、実は、これは私が学生たちに語っていることではありません。それは私がゼミの学生諸君を見ていて強く感じることなのです。

四年間で大きく成長する学生諸君を見ること。これは教育に携わる者にとって最高の喜びです。そんな機会をたくさん与えてくれる学生諸君に、私は心から感

謝しています。そして、これからもゼミの仲間に入れてもらえればと願っています。

## 麗澤大学のよさを感じられるゼミ

国際経営学科四年 三戸 裕子

現在、高ゼミは四年生九名、三年生一〇名、二年生一三名、白熱した討論を毎回繰り広げています。以前は三・四年生のみで行っていたのですが、二年生も加わり、ますます熱気が感じられます。このゼミには毎年、留学に行って来た人やこれから行く人も混ざっていますが、今年は、海外からの留学生も四人います。ゼミのみんなが違った視点から意見を投げかけてくれるので、いい影響を与えてくれているのではないかと思います。毎年ゼミ生が下級生の選抜の面接を行っているのですが、選ぶ方も選ばれる方も大変です。今年も自分の意見をもった個性的な人たちが集まつたのではないでしようか。初めのうちは、なかなか自分の意見を言えないものですが、代々受け継がれてきた高ゼミの空気というものが、それを変えていくようです。

女性が強い、とは先生も冗談混じりでよく言っています。高先生の研究は企業倫理ですが、ゼミは自分たちのやりたいことを行える環境にあります。今まで行ってきた内容を挙げると、高先生が書かれた『ビジネス・エシックス』をみんなで読み合わせし、それに対しても先生が理解を深めるように様々な例を出して紹介してください。日経新聞や雑誌で自分が気になった記事をみんなの前で発表して討論する（特殊法人関連を選ぶ人が自然と多くなりました）。それに絡めて、先生が最近の話題を、本当に分かりやすく解説してください。初めて日経新聞を読んだときは、その難解さについていけず、発表する題材探しも苦労していましたが、一年以上続けてみると、話のつながりが見えてきて、面白くなってきました。

長期休みの時には毎回ゼミ合宿を行っていますが、それは本当に過酷です。大体毎回、個人やグループでの発表をメインにして行います。準備段階も苦労しますが、難解な発表を一日中聴き、討論しつづけ、夜には徹夜で勉強することの方が大変です。場所も遠出は

せず、キャンパス内の研修寮で行うので、まさに勉強一色です。最近では、アンケートの分析を行ったのですが、本当に大変でした。こんなに内容が盛りだくさんで大丈夫なのかと不安になるほどです。合宿が終わってからは、開放感からか、いつもホッとします。



学内の研修寮で夏合宿。卒業生2人もかけつけてくれた  
(2000年9月)

今年私は就職活動をしたわけですが、私の就職活動はもしかしたら就職活動ではなかつたのかもしれません。というのも、ゼミで先生の話を聞くと、どうしても企業を見る眼が厳しくなってしまうのです。自分の求める会社は今の社会にはない、と憤りを覚えることありました。私の内定が遅くなつたのは、ゼミでの話を真面目に聞きすぎたからではないかと、先生に心配をさせてしました。

高先生は、自分たちが欲している、吸収しよう、といいう意気込みを伝えると、きちんとそれに答えてくれる先生です。以前ある講演会で先生が講師になつたとき連れて行ってくださつたのですが、普段教室で見る先生とはまた違つて、感激してしまいました。私は高ゼミに入つて本当に幸せです。大学においてゼミの占める位置は、とても大きいものだと思います。麗澤のなかで高先生やゼミのみんなと出会えたことは、私のこれから的人生において大きな意味をもつてくるものと思います。私はこの麗澤大学で、高ゼミで学んできたことを誇りに思い、また、充実した学生生活を送

ることができたことに感謝します。本当にありがとうございます。  
ございました。

### What is a seminar ?

(国際経営学科・平成一三年卒・六〇期) 吉田健一郎

ゼミで学んだことを説明する前に、まずゼミとはなにか??:ということを示しておきたい。というのも、ゼミと他の授業とが異なる点を明らかにすることで、ゼミで学んだことを一層鮮明に伝えることができるのではないかと思うからです。

ゼミの特徴を列挙すれば、①少人数制である、②指導教授や他の学生との親密性が高い、③卒論がある、の三つです（もちろん、③を除けばゼミと同様の特徴をもつ授業が存在することを否定するものではない）。それでは、ゼミとは具体的に何をする場なのでしょうか??

単に知識（教科書に載っている類のもので、先人の知といつてもよい）を得ることだけが目的であれば、それが少人数である必要は無く、教授と学生、ないし

は学生同士が親密である必要もありません。マスプロ型の授業でも、それは十分に達成可能なことでありますし、またそのとき教授に課せられた任務は、その先人の知を学生に伝えることのみです。これは極端な話、教壇の前で講義が行われなくとも（すでに録画されたものであっても）かまわないことを意味しています。

ゼミと授業との最大の違いは卒論があることです。

ゼミは大学における最終目標である卒論を書くにふさわしい環境を備えていなければなりません。なぜなら卒論を作成するには、単に知識があるだけでは不十分で、それを使う訓練をしなければ卒論を作成することはできないからです。卒論を書くにふさわしい環境とは、知識の習得を目指すだけではなく、頭を鍛えることができる環境です。ただ單に行われる講義とは違い、わからないことや疑問に思うことを指導教授や他の学生との議論を重ねることで整理していく、その過程で卒論を書くに値する脳を形成する場がゼミなのではないでしょうか。

また、その際に用いるマテリアルが、指導教授の専

攻である学問分野です。これは自分が興味のある分野であれば、経済学・経営学・会計学など、なんでもよいということになるでしょう（そのために複数のゼミが存在しているのですから）。まとめると、ゼミとは大学において自分の興味のある学問を通じて、知識を蓄え、思考能力を養うこと目的として開講された授業であるといえます。



2000年7月柏クレストホテルで「高先生教授昇格祝い」、現役生・卒業生とともに

高教授のゼミは「企業と社会」というきわめて自由度の高い内容なのですが、その分、様々な知識がかなへます。しかし、その反面、ゼミ生たる立場から見ると、ゼミの目的が思考能力を養うことであるのなら、高教授のゼミは私にとってベストでした。なぜなら、高教授は私たちに対して、様々な問い合わせを投げかけ、私たちとともに考えてくれたからです。

長くなりましたが、私がゼミ活動を通じて学んだと いうより、得たことの中でも最も大きいのは「高教授や他のゼミ生の思考特性や知識を、自分の思考特性に取り入れたこと（もちろんすべてではない!!）」です。

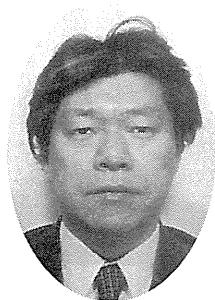
高教授がこれを読んだら、「まだまだだ！」と私は 言うかもしれませんけど：（笑）

## 都市システム論ゼミ

—じっくりと肉薄し立体的に考察する—

教授 高辻秀興

国際経済学部 専門演習（産業情報）



建築家ル・コルビュジエは、建築をつくるとは「問題を秩序化することだ」と言つた<sup>(1)</sup>。ロンシャンの教会など、コンクリートの可塑性を活かした独特のフォルムの建築物で知られるコルビュジエだが、実は当初から彼の最大の関心事は都市づくりにあった。煙に汚れた狭い空を仰ぎ見るだけの、陽の当らないパリの裏まちの実体験が彼を都市づくりに駆り立てたらしい。

彼が見出したソリューションは、都市環境には太陽・空間・緑の三つの要素が必要だということだった。日照・オープンスペース・自然環境である。それらを確保しつつ三〇〇万人の都市を築くことが可能であることを、彼は具体的に設計して見せることがで証明した。

その過程で、歩車分離、ピロティ、屋上庭園、蜂窩状住宅、高層住宅、その他数多くの現代都市デザインの技法を産み出した。驚くことに、それは一九二〇年代初めのことである。

コルビュジエがやつたのは、理想システムを想定し、現実との乖離に問題を発見し、問題の要素を整理し、原因を探り、処方すべき個所を見つけ、解決の技法を案出し、設計してみせることでフィーディビリティスタイルをやる、という一連のシステム設計であった。

わが「都市システム論」ゼミは、ひとまずこのアプローチを念頭に置く。ゼミ生は、まず各自が問題だと直観した対象について、望ましくはどうあればよいの

かという理想システムを作業仮説として脳裡に描かねばならない。それがゼミ論文のモチベーションになる。しかし、コルビュジエの最大の誤算は、第一に都市の空間を支配する力は物理的技術ではなく、経済と社会と土地利用のメカニズムだったということ、第二に彼が理想システムを提案するのは勝手だが、それを受け入れるかどうかは社会が決める事だという点であった。都市は権威者が隅々まで支配的に設計してできるものではない。市民、政府、企業、専門家など様々な意思決定主体の選択と行動と創造と交換と相互作用とが、空間に投影されてできる。都市はつくるのではなく形成される。

「コルビュジエが描いたのは田園の退屈さだ。都市は猥雑でよい。都市は計画するな」といった趣旨のことを述べたのは、反都市計画派の社会学者J・ジェイコブスである<sup>(2)</sup>。彼女は、「都市は農村から産まれたのではない。都市が農村をつくったのだ」と言う<sup>(3)</sup>。都市の産んだ技術が農業生産を高め農村を繁榮させたというのだ。そこから都市の原理の種明かしが始まる。

都市に新しい仕事が産まれて産業となり、分業を促して関連産業が育ち、移出産業となつて都市を成長させ、移入代替が生じてさらに都市が発展する。叙述的だが、彼女が都市の歴史を観察して得た知見には、都市モデルのヒントが数多く隠されている。

そこで、わが「都市システム論」ゼミは、二つ目に、都市をつくるという態度を一旦保留して、都市と決定の仕組みをよく観察してみるという態度をとる。都市経済学、都市史、都市計画制度、社会的選択論を渉猟したり、事例分析・統計分析・フィールド調査を通じて事実を確認したり、いかなる社会集団がどのような決定を行つたかを調べたり、等々のスタディをする。これを通じて、問題の拡がりを認識し、当初抱いた素朴な理想システム案を修正して、より現実的で膨らみのある代替案集合を築くきっかけとする。

さらに政策代替案の有効性と実現可能性とを検証するモデル分析のステップまで進みたいのだが、現状ではそこまでたどり着けない。しかし欲張らずとも、むしろ問題意識を抱いた対象にじっくりと肉薄し、立体

的に考察し、理解したことを自らの表現でまとめることが、ゼミ生にとって大きな財産になるものと考える。三年次が勝負だ。

(1) 都市ワークショップ(一九九〇)、ル・コルビュジエ、第一巻、VDT

(2) J・ジェイコブス(黒川紀章訳、一九七七)、アメリカ大都市の死と生、鹿島出版会

(3) J・ジェイコブス(中江利忠訳、一九九一)、都市の原理、鹿島出版会

## ゼミ活動を通して学んだこと

—身近なことから先端が学べる—

国際経済学科四年 鈴木麻衣子

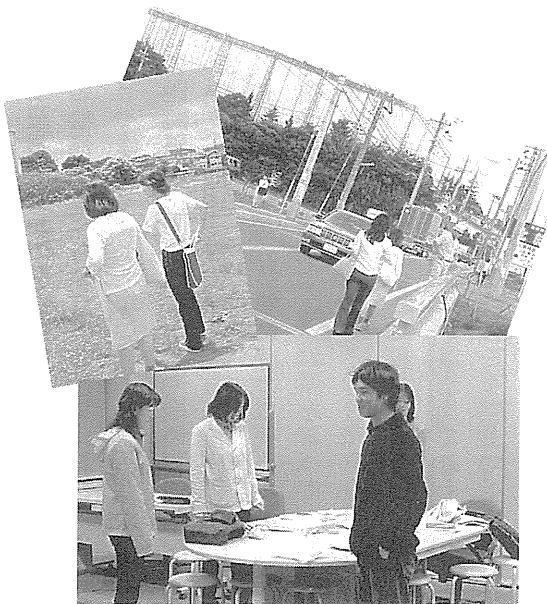
ゼミ活動は、自分のテーマに沿って、どの先生のゼミを選択するかというところから始まると思う。私が在籍している「高辻ゼミ」は、都市システムやコンピュータに関心を持つ学生が所属している。「都市システム」という言葉やそこに絡む問題は、我々の生活に縁遠い

身近な問題だ。少子高齢化・不況・環境悪化の現代、将来に向けて望ましい都市の居住環境をどのようなものにしなくてはならないか、早急に考え、まちづくりを実行する時期にきている。

そこで私は、都市システム論の中で土地区画整理事業や土地証券化について研究をしている。「まちづくり」や「土地区画整理」というものは、ただ単に、土地を区切って商業地区や工業地区などを並べていくような簡単なものではない。市民と一緒に、都市環境・都市経済・交通などあらゆる都市の構成要素から問題・課題をクリアし、街を産み出していくのだ。大学一・二・三年で得たミクロやマクロ経済の経済系知識、法学、経済倫理学などと共に、都市計画の分野を加えて考えていく。「まちづくり」は、思った以上に奥が深い。

私が高辻ゼミに所属しようとした動機は、以前公務員という職業を目指していたこと、また地元の街が「土地区画整理事業」を行っていて問題を抱えていたことによる。地元の市職員を目指す以上、市民を巻き

込み、また身近で発生している問題は無視できないと思つたのだ。そこで、問題の解決策を提案できないかと思い始めた。そこが出発点である。事実を調べていくうちに、この問題は行政・事業者だけではなく、市



フィールド調査の様子（1999年）

民一人ひとりがまちづくりに関心を持ち参加すべきである、ということがわかつた。一般市民の関心や理解を得るにはどのような作業をしたらよいかといった、人の動きを見る経営的な考え方が必要であることも、ゼミ活動で学んだことの一つかである。都市システム論は経済専門ゼミ（現 産業情報専門ゼミ）の中で、最も身近に絡んでくる問題を取り上げているのではないかと思う。

また、高辻ゼミでは、三年次でゼミレポート四万字、四年次で卒業論文六万字を提出することが単位取得条件となっている。これまでに提出したゼミレポートをステップに、これから提出予定の卒業論文は、大学生生活の学業面での集大成となる。卒論は前年の項目に加え、土地証券化といった新しい分野をとり入れていく予定である。都市システムと金融工学を絡ませて考えられるのが面白いと思う。なお、三年次のゼミレポートを作成する過程では、関連する内容を調べ、考え、文章を構成し、また先生をはじめ先輩方にアドバイスを頂き、その他学業以外でも学ぶことが多かった。そ

のことがあって、就職活動では自信を持ってゼミ活動について語ることができた。（今考えてみると、これが就職活動の勝因であったのではないかと思う。）

高辻ゼミはアットホームなゼミだとと思う。先生と学生との距離感、上下のつながりや横の関係が良い。ゼミ活動への質問や、個人研究と悩み事の相談、就職活動のアドバイスなど、多岐に渡って交流がある。先生のお誕生日会（ケーキなし、お酒とおつまみで）も先輩から受け継いだ行事の一つである。そして私たちから後輩へと末永く続けられたら、素敵なことだと思う。

ゼミで研究したことは、卒論提出で終わるのではなく、社会の一員となつた時にこそ生きてくるものだと確信している。

## ゼミ活動を通して学んだこと

—物事を多方面から見ていく—

（国際経済学科・平成一三年卒・六〇期）岡田 由加  
私がゼミを選択する際の基準としたのは、大学時代

の成果として形（実）のあるものを残したいというこ<sup>と</sup>とでした。そんな中で高辻ゼミを選択した理由は、私達が生活している街をより住みやすくするにはどうしたらよいのか、また自分が日ごろ疑問に思っている都市問題を解消するにはどうしたらよいかというような事を研究していくことで、大学時代の成果として形あるもの、いわばモデル都市のようなものを作り上げてみたいと思ったからです。

ゼミ活動の二年間を振り返ると、私は特に一つの事を研究活動から学ぶことができたと思います。それは、「物事を多方面から見ていく」ということです。

物事を多方面から見ていく事の大切さというのは、ただ都市開発をすればそれでよいというわけではなく、都市開発の背景に写る物事も見ていかなくてはならぬ、ということです。私の研究内容は、「都市気候温暖化抑制に対する緑化効果に関する研究」でした。この研究は、都市部に見られるヒートアイランド現象の緩和策としての都市緑化に着目し、緑化することで本

本当に気温を下げる事ができるのか、という内容でした。これを一面だけから見れば、単に都市緑化を行えばよい、という事で終わってしまいます。しかし、都市緑化を多方面から見ていくと、緑化後の管理問題や費用の問題、周辺の人々の意見、緑地の活用問題などといったあらゆる問題が浮かび上がり、簡単には終わらなくなります。

研究を進めていくに従い、一つの幹から多くの枝が発生しているということに気づかされ、視野を広く持つて物事を観察していくことの重要さを学びました。同時に、学というものの奥深さ、自分が知らないことの多さを知り、もつとたくさんの事を学んでいきたい、と自分の興味の幅を広げる事ができました。

物事を多方面から見ていく事の大切さは、柏の住民で構成される「まちづくりマーリングリスト」に参加したことからも学ぶことができました。マーリングリストでは、都市開発を行うには十人十色の考え方があり、それぞれの立場に立って考えてみることの重要性、多くの人の意見を取りあげて検討することの重要性、

そして全員にとって良い結論を出すことの困難さを教えられました。

二年間のゼミ活動を終えて今思うのは、ゼミというものは大学生活において大切な貴重な時間ではないかということです。実際の研究活動は本当に短い期間でしたが、その分だけ中身の濃い二年間となりましたし、自主性に任せられている大学の勉強において、ゼミの研究で疑問を持ち、考え、行動していくことは、社会に出ても必要な事なのではないかと思います。また、自分の研究を深めていくだけでなく、先生や仲間から学べる事、刺激を受ける事がたくさんあると思います。

物事を多方面から見ていくことの大切さを学び、多くのことを吸収できただけではなく、都市開発について学んでいくことの楽しさと面白さも味わうことができた高辻ゼミでの二年間というのは、私にとって本当に大きな二年間となりました。

(積和不動産勤務)

## 経済学は環境を救う

教 授

小 野 宏 哉

国際経済学部

専門演習（産業情報）

### ● 環境政策—社会環境システム分析とは

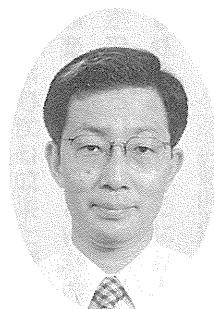
小野ゼミでは、環境政策を環境経済学の基礎の上に研究する。環境問題そのものは時代の要請として日常の事柄であるが、環境経済学という学問分野自身が新しくかつ広いので、研究も教育も、その学問的核の確立に試行錯誤を重ねているのが実情である。

広い視野を要求するテーマに対して「社会環境システム分析」という方法論に親しむことを求めており、学科所属に係わらず環境経済学が基本であることは変わっていない。一見、高校生程度のレポートで済みそうな分野と思われるが、実は全く違う世界である。

### ● ゼミのねらい

基礎としての環境経済学を必須として、それ以上は自由なテーマ選択を指導している。環境問題を取り上げながらも、経済学的な知識・視点で対策・政策を考えること、環境を評価する技術を身に付けることを求めている。

同時に、問題意識を大事にして、課題の探索、作業仮説の発見、論文の作成、プレゼンテーションと議論という一連の能力を身につけることも重視している。環境経済学自身が学問分野を確立しつつある時期なので、学生にとっては経済学や経営学を修めた後で、学際的研究として大学院で取り組むほうが望ましい。



卒論で取り組むには、それなりの覚悟が必要である。

標準的教科書学習の域を越えたところまで進まるを得ないので、未知なるものと取り組むノウハウを獲得することも大きな目標である。

### ● 学生に求めること

必要な努力は、例えば、卒業に必要な一四〇単位に對し、その半分七〇単位に相当する。環境科学の類は自分で勉強するとして、ミクロ経済学やマクロ経済学が解って、さらに、計量経済学、会計学等の知識が課題に応じて必要となり、取り組むには勇気がいる。

経済学の創世紀と同じく、データの役割が大きいにもかかわらず、その整備は途上にある。定性的な分析だけでなく、自分で集めたデータをもとにモデルを数理化・計量化し、政策を論ずるというスタイルが望ましい。産業連関表や部門別マクロモデル、費用便益分析などは避けて通れない。

国際経済学部であれば、例えばCO<sub>2</sub>排出削減効果を検討するにも、エクセルで産業連関分析を行い、その能力を超えるべき言語でプログラミングを行うこと

が期待される。この点では、国際産業情報学科のカリキュラムに優位性がある。

### ● 学生が受け取るもの

経済学の基礎知識とデータ分析技能を身につけていれば、そこから先の自由度は大きい。その分、ゼミ発表や卒論の指導を厳しくしており、そこで、学生は衝撃を受ける。

時間割上のコマは最小限の事項と割り切り、自主ゼミ、ワークショップ、合宿、発表会と、行事をこなすが、こんなに一生懸命やつても卒業論文がなかなか完成しない、という学生の声を耳にする。

今では「環境経済学」という専門科目が開講されており、自主ゼミの形で指導していた時代に比べれば環境が整っている。重要課題として毎年誰かが取り組む環境価値の計測は、統計分析をもとにしているが、特別な授業・演習はない。今年から演習形式で特別に機会を設けて、必要な水準まで自然に学習するように工夫を始めた。

私自身が研究者として十分な成果を出していない分

野でも、学生は時代の要求に従って取り組もうとするところが頼もしい反面、悩ましいところである。

### ●ゼミで学んだ成果

新しい分野に取り組む気概のある学生が中心なので、独立心も強く、進路もまちまちである。ここに登場する、シンクタンクの研究員、ネットワークの技術者という卒業生、環境会計を研究する在学生を見ても、課題と同じく職業選択の自由度が大きい。鍛えられたという経験が一番ということだが、語学とプログラミングが自由自在であれば、もっと強力だろうと期待している。

国際経済学科四年 中野 慶彦

### ●ゼミとは大変なところ

小野ゼミでは、多くの事を学び身に付ける事ができましたが、この一年半を振り返ると、楽しい事よりも、辛く厳しい事の方が多かった気がします。

ゼミに所属した当初、先生に「ゼミは学部の集大成なのだから、二年間で卒業単位の半分に相当する位の

量は勉強するように」とお話を伺ったことがあります。その頃の私は、単純に「七〇単位に匹敵するような勉強量がこのゼミでは必要なのか」と、ただ驚くばかりでしたが、先生はそれ位の意気込みでゼミに取り組むことを望んでおられたのではないか、と今は思います。

実際にゼミが始まるとな、厳しい局面が度々やってきました。一つは論文やレポートの発表です。先生は、疑問や問題点があると、納得のいくまで追求をされます。その質問に答える事ができない時、私は本当に悔しい思いをしました。

しかし、その悔しさと挫折があつたからこそ、研究の視野が広がり、より発表に熱意を持つことができたのだと思います。また、発表では、内容だけではなく、発表するうえでの姿勢や態度、間の取り方などの技術も教えていただいたので、大変為になりました。

二つ目の厳しい局面は、ゼミ合宿です。ゼミ合宿は二年間で計四回行いましたが、特に最後の四年の合宿では、最終日に論文の中間発表を控えていたので、睡眠時間もほとんど取れず、とても苦しい思いをしまし



2001年12月、4年生卒論発表会

た。今となっては、体力の限界へ挑戦しながら勉強した事が、貴重な思い出になっています。

### ●ゼミで身についたと思うもの

小野ゼミでは、環境に配慮をした経済活動を行つていくという大きなテーマのもとに、ゼミ生各自が、炭素税、排出権取引、環境会計や地球温暖化など、世界や日本で注目され課題とされているテーマを取り上げ、検証・考察をしています。これらは、今後ますます重要性が高まる事が予想されるので、ゼミで学んできた事を社会では是非活かしたいと思います。

また、ゼミでは、ワードやエクセルに加えてパワー・ポイントも活用し、充実した情報設備の中で、研究や発表を行う事ができたことを素晴らしい思います。そして、競い合い、励まし合って、苦楽を共にしてきた素晴らしいゼミ生達に出会う事ができて、大変嬉しく思います。

厳しいゼミではありますが、ゼミ生は各自が自分の研究テーマに基づいて主体的に研究に取り組んでいくので、そこから学ぶことが多く、とてもやりがいのある

るゼミであると私は思います。

(国際経済学科・平成九年卒・五六期) 柳 美樹

### ●挑戦の連続

大学二年で国際経営学科から国際経済学科に転科し、ゼミでは当時最新の環境経済統合勘定を取り組み、さらに東京工業大学大学院に進学しました。環境経済学の講座ができたばかりの社会理工学研究科で学び、温暖化防止条約における国際交渉のモデル分析を修士論文としてまとめました。株式会社日立メディコでは人事も担当し、二〇〇〇年八月より(財)日本エネルギー経済研究所に勤務し、計量分析部で研究員として調査・研究を行っています。

### ●ゼミで学んだこと

ゼミの目的は最終的には論文作成ですが、形はどうであれ、一つのものを自分なりにまとめる、オリジナリティーを持つという作業が非常に大切だと思います。

また、専門書を曲がりなりにも読みとおす輪読も勉強になりました。

教授からの指導、ゼミ生同士の意見交換等も大切なプロセスで、迷いながら進む力をつける作業なのかも知れません。最終的には、文章という形にすることでも学ぶことが大きい気がします。

個人的には、ゼミに三つの期待を持っています。

一、考える場所の提供(方法論の指導、学生室等の提供)。二、道具をもつ(経済現象に関する知識をもつ、経済分析の手法を知っている、情報系の知識・言語を知っている等々)。三、道具の思想(背景)を知る。

### ●ゼミで学ばなかつたこと

在学中には、研究室間の論文発表会がありませんでした。学生数が多いので難しいとは思いますが、あれば力がつくと思います。学部という大きな単位で行うと、複合競技的要素が増すと思いますが、社会に出れば、そのような他流試合を何度も経験することになるので、よい力試しの機会になります。

### ●企業から見れば

かつての人事担当者の実感として、社内で相当の人材の洗い出しを進めつつも、他業種も含め、企業側も



2001年8月、学内の研修寮で4年生夏合宿

採るべき人間像がわからず採用法を模索しているという現状があります。そのような環境下において、「自分は（曲がりなりにも）これをやった」といえる人は強いと思います。

麗澤大学のように少人数の大学には、他大学にはない行き届いた環境があります。私も、統計、コンピュータ言語等の科目を履修していくことで、比較優位が多少なりともありました。ただ何よりも、道具だけにとどまらない、道具の下支えになる知識・論理・歴史を学ぶ場所であってほしいと思いますし、それが専門学校には無い大学の素晴らしいところだと思います。

（財団法人 日本エネルギー経済研究所研究員）

●ゼミで学んだこと  
（国際経済学科・平成二一年卒・五八期） 脇田 真希

私が最終的に取り上げたのは「産業連関表を用いた二酸化炭素排出量影響評価」でした。環境という漠然として曖昧なものを、経済という尺度である程度の仮

説を立てて行く、そんな研究は私にとってとても興味深いものでした。先行研究に基づいて新たに自分で類似したモデルを組み上げて行く作業はとても困難でしたが、自分の研究が進むにつれて勉強することの苦しさだけでなく、楽しさを感じることが出来たようになります。

### ●仕事との係わり

現在はコンピューターネットワークのエンジニアとして働いており、大学で学んだ事とはかなりかけ離れています。職場に文系出身者は二人しかおらず、仕事の内容も入社してから勉強を始めたので、一からのスタートで、とても苦労をしました。入社当初はあまりにも出来なくて、途中で辞めてしまいきつたが、仕事を続けていられるのは学生時代の経験があったからです。

今では「学生時代に卒業論文作成にあれだけ努力す

る事が出来たので、これからも辛いことがあっても乗り越えていける」と思うだけでなく、学生の時以上に勉強をしていると感じるほどの辛い仕事でも、なんとか自分を励ますことが出来るようになりました。

### ●ゼミという社会

また、自分が努力することで周りも真剣に応対してくれるということも、ゼミを通じて感じるようになりました。四年生の論文締め切り間近になって急にはひとり始めた時も、先生はお忙しいのにも関わらず、時間を取り組みぶつかって行けば、先生は必ずそれに応えて下さいました。

また、学ぶこと、努力することと同時に、仲間と共に励ましあうことの楽しさを、このゼミで学びました。短い二年間で、互いに励まし合い、助け合える仲間が出来た事をとても嬉しく思うとともに、これからもその仲間達と共に頑張っていきたいと思っています。

(ネットワーンシステムズ・ネットワーク技術部勤務)

## 学び成長する就職活動

—麗大生に見る近況—

就職部長（教授） 大貫啓行



### △激変する就職環境▽

近年、大学新卒者の就職活動環境は、激変している。バブル経済の崩壊後、産業社会を巻き込んだ大きな構造変化のうねりの中で、新たなビジネス・モデルの構築と生き残りをかけ、各企業は大競争時代の真っ只中にある。一九九七年一月の就職協定廃止とその後急速に進むIT化と本格的なネットワーク時代の到来は、採用する側・就職する側いいずれにとても常時活動を可能とし、今や「早期化、多様化、長期化、厳選化」が定着した。大学の修学期間は、就職活動の時間差し引けば、実質三年にも満たないという問題状況すら指摘せざるを得ない。

### △問われる学生時代の過ごし方▽

本学では、三年前から一、二年生を対象に、各学期初めのオリエンテーションで、各自が将来のキャリアデザインを描くよう動機付けることに力を入れ

こうした状況の中で、就職部として、どんなことに気をつけながら学生と対応しているのか、また日頃就職支援という場で学生と接する中で感じたことなどについて、その一端を紹介してみたい。結論と

して、困難な状況下であるにもかかわらず、本学の多くの学生が就職活動を通じて多くを学び、たくましく成長していることを実感できていることを報告したい。

ている。学生側からみれば、自分自身の「就職」という言葉を実感をもつて直接耳にするのは、これが初めての場となっているようだ。就職活動をする上で、最もベースになり重要なのは、大学生活をいかに目的をもつて過ごすのかということ、大学での自分自身の成長過程そのものが大切だということについて、じっくり話をしている。本番の就職試験（面接）で、企業の採用担当者が最も知りたいのは、学生の「素顔」そのものとなっているからだ。学生の人柄、特徴などから、入社後どんなことをやってくれそうなのか、そのことを知りたくて手を変え品を変え聞いてくる（いわゆるコンピテンシー採用）。実際、各企業の採用担当者が一番聞いているのは「学生時代に学んだこと・経験したこと」なのだ。「目的をもつて過ごそう」という意味は、まさにここにある。

学生に限らず私ども日本人には、就職は学生生活の「ゴール」という認識が強い。ゴールのイメージには、終わりといったある種の暗さも伴っている。

かつ、学生は面倒な就職という問題に向かい合うことを、できるだけ先送りし、避けたい心境になります。だから我々はあえて学生に「就職はゴールではなく、これから始まる社会人としての永い人生の『スタート』なのだ」との前向きの認識を持たせるように努めている。可能な限り早めに卒業後的人生を視野に入れ、どれだけ現在の自分と前向きに向き合えるかが、肝心になる……と考えている。

さて、就職活動の本格的スタートは三年生後期からだ。ただこの時期から留学する学生も多いため、本学では夏休み直前の七月初旬に三年生向けにプレガイドンスを開き、就職活動の流れ・進め方や、心構えといった点をひと通り説明するようになっている。そして後期初めの九月中旬に「就職ガイダンス」を開催する。そこでは学長出席の下、「出陣式」を行ない、夏休み明けの三年生を覚醒？させ、本格的に始める就職活動への決意を盛り上げる。また同日、自分の適性を計る一助にするため、適性検査を実施する。自分のやりたい仕事を探すには欠かせないデー



合同企業セミナー（2001年2月14日）

タである。このようなデータは多いに越したことはない。

就職活動の二本柱は、「自己分析」と「業界・企業研究」。就職部による各種支援も、ここからが本番となる。最近本学で実施している対策講座・行事の具体的な内容については、文末の就職支援活動予定表をご参照願いたい。

#### ▲麗大ならではの「こだわりの就職支援」▼

本学の就職支援活動の特徴を一言でいえば、少人数教育の特徴を生かした「こだわりの就職支援」だ。こだわりの第一は、学生とは「フェイストゥフェイス」による支援を心掛けていることだ。平成一三年一〇月に、三年生全員を対象に『全員進路相談』を実施した。狙いは、「就職活動のポイント」の復習と、これから就職活動を進めるに当たっての疑問・悩みを聞きながら、場合によつては「自分とはどんな人物（特徴・タイプ）なのか」に気づいてもらうこと等であり、全員が就職活動を無事スタートできるよう心がけている。

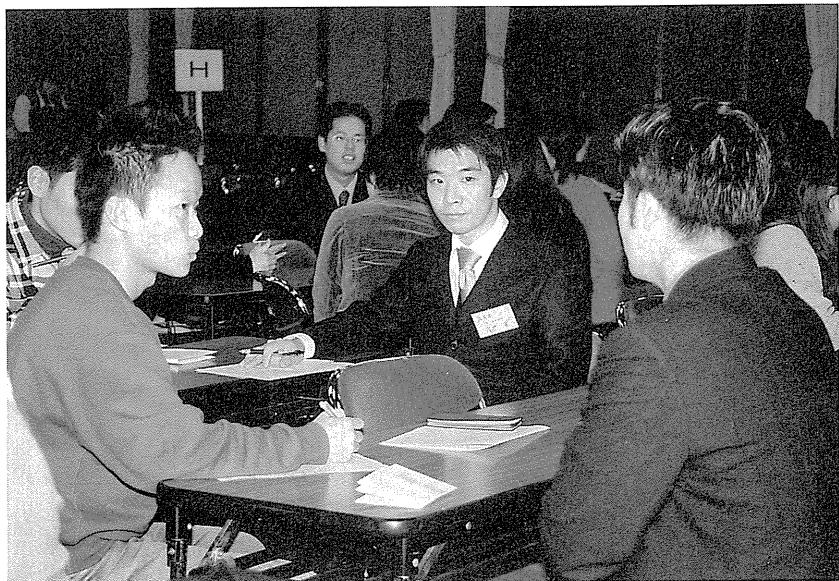
この段階での学生との面談で、私どもが特に配慮していることは、進路について思い悩んだり、もしかして自分は就職できないのではなどと心配して独り落ち込んでいる学生が、僅かながらいることだ。従つて、私どもは、まず学生の話をよく聞くように心掛けている。学生に「就職活動に関して、誰に相談するか」を聞いてみると、友人・先輩との答えが多い。今日の学生達は、少子化時代に育っているせいか、異世代とのコミュニケーションをとることが苦手な人が多い。本学の場合、少人数教育が実践され、先生方の研究室の開放などのチャンスも常時あるのが幸いだ。ただこうした学生気質への配慮もあって、就職活動の初期では、できるだけ一年先輩の内定者の就職体験談を聴いたり、社会人二～三年目の卒業生との情報交換の場を設ける等、色々な場面を通じてコミュニケーション力のアップと就職観の醸成に努めている。

就職活動も本格的になってくる段階で、学生達からよく「どうすれば採用されますか?」と質問され

る。偏差値重視の受験学習で染み付いた独特の発想なのか、とにかく容易に正解を求めたがる学生(ひょつとして親も?)が多い。この問いを「どうすれば生き甲斐が得られるか」という発想に変えなければいけないと考えている。

それと多いのが、何かにつけて受身の学生。本学では大学教育の一環としての就職活動は、主体性や自立性を身につける格好の機会だと捉えている。私どもは学生達に、まずは積極的に行動しなければ「運」も「ツキ」も巡ってこないと、口を酸っぱくして言っている。

第二は、「生の情報」へのこだわりだ。就職活動では、「自分を知る」とともに、「相手(企業)を知る」ことが大切だ。自分のやりたい、適した仕事、生き甲斐のある仕事探しがまず就職活動のベースになることで、就職部では、個別面談やグループディスカッションを通じて「自分を知る(自分に気づく)」ことを促している。「自己分析」作業への支援と並んで、「相手(企業)を知る」ことへの支援を重視し



「卒業生との懇談会」における在学生との情報交換（2001年12月8日）

ている。

学生は、いまやインターネットを活用し、居ながらにしてそれなりの企業情報を収集することができる。しかしそうして得られる情報は、量的には充分でも、質的には不充分だ。特に今日の学生は、この種の「落とし穴」に陥りやすい。就職活動で最も重要な「仕事内容、会社の将来性、待遇、社風などを自分で確かめ、自分の価値観とのマッチングを図る」には、実際に企業訪問し、自分の目や耳、つまり五感を働かせての就職活動が不可欠。就職部の役割として重要なのは、企業訪問によって実際の仕事内容など企業の「生態」をできるだけ把握し、いかにして生きた情報を学生に提供するかということだ。

#### ▲たゆまぬ改善が求められる就職支援▼

今後、ますます多様化する就職環境に対処するには、就職部による支援に留まらず、広義のキャリア教育に、大学全体として取り組むことが重要であると考えている。こうした考え方の下、本学の考えている「就職支援活動での当面の改善点」を、以下に三

点触れておきたい。

第一は、低学年次向けキャリア教育の充実。現状は大部分の学生は、三年後期になってから自分の将来を考え始めている。適性、やりたいこと、またその延長線上に、具体的にどんな業界・企業や職種があるのか、こうした重要なことを、追い詰められるよう短期間で決めなくてはならない。そこで、低学年次から将来の動機付けを徐々に行っていけるよう、低学年次からのキャリア教育の充実を図りたいと考えている。

第二に、インターンシップ（就業体験学習）の本格的導入。最近、若年層の離職率の高いことが社会問題化している（入社二～三年目で、三～四割が離職）。学生の就職観をどう育成しながら本番の就職活動に導いていくかが、私ども就職支援に携わる者の重要な課題である。インターンシップは、いわばその有効な処方箋として、全国の大学の約三割が何らかの形で取り組み始めており、本学でも今年度より就職支援の一環として、夏季休暇を利用して試行

した。結果は、受け入れ企業一六社に、学生二三名が参加。今後は、単位化などを含め、更に本格的内容を目指し、受け入れ企業数・参加学生数を増やす努力を行っていきたい。

第三に、就職に関する情報発信機能の整備強化。就職部専用ホームページの設置を現在準備中である。求人情報など企業情報や各種支援行事の開催情報を、ネットワーク時代に相応しく、学生にタイムマリーに提供する環境の整備・強化を更に図っていきたい。

以上、本学の就職支援の状況を概観してきた。就職部の「就職活動の相談の場」、「企業情報の収集の場」としての役割機能の重要性は、ますます高まっている。私ども就職部部員はこのことに心しながら、また日頃の学生への支援を通じて「共に成長」していくことの確認と決意を新たにしている今日この頃である。

## 平成二十三年度卒業生 主な就職内定先一覧

\* 業種別五十音順 法人形態を省略（平成14年2月10日現在）

- △製造業▽ アライドテレンシス、イシダ、市光工業、伊藤園、イナックストシステム・ホールディングス、SMC、オリエンタルモーター、紀文フードケミファ、クリッカ、KOA、コマツ、小森コーポレーション、サンヨー食品、スタンレー電気、太陽誘電、高橋カーテンウォール工業、立川ブラインド工業、千代田インテグレーディスコ、十川ゴム、ナリス化粧品、ニフコ、日本ケミコン、日本シイエムケイ、日本食研、日本電産、フジクラ、富士通、フジマック、不二家、フランドル、本田技研工業、ミヤチテクノス、ミルボン、レオン自動機、YKK  
△卸売（商社）▽ アークレイ、アステイ、イーエムシステムズ、飯田通商、ウライ、加賀電子、兼松エレクトロニクス、川鉄商事、共立食品、サッポロビール飲料、サンエス、サービシー、ジャック・ホールディングス、ジャパンフード、ジュピターコーポレーション、正栄食品工業、東京産業、東京ゼロックス、豊田通商、日本アルコン、ハピネット、富士エレクトロニクス、富士ビジネス、三菱商事テクノス、ミツワ電機、守谷商会、菱光産業、ワイケイティ（YKT）  
△小売業▽ 金鳳堂、コナカ、コメリ、資生堂販売、セブン-イレブン・ジャパン、ツツミ、ツルカメコーポレーション、日産プリンス神奈川販売、日産プリンス千葉販売、ニチエイ・カーマックス、日本マクドナルド、日本ロレアル、日本瓦斯、ビックカメラ、卑弥呼、ファーストリテイリング、フジタコーポレーション、ブルーブラス、松屋、ヨシオカ・サンテ、ヨドバシカメラ、ラオックス  
△飲食店▽ ジョナサン、すかいらーく、ニッコクトラスト、プロントコーポレーション、モンテローザ  
△旅行・ホテル▽ エイチ・エス、近畿日本ツーリスト、ジェイティービー、プリンスホテル  
△運輸▽ 伊勢湾海運、空港ターミナルサービス、佐川急便、山九、ジャルコス、新東京旅客サービス、ソクハイ、日航貨物ターミナル、日本航空、ニヤクコーコーポレーション、富士ゼロックス流通  
△金融▽ 秋田銀行、群馬銀行、京葉銀行、新光証券、住友生命保険、大和證券グループ本社、千葉銀行、東海東京証券、東京三井銀行、東京三菱投信投資顧問、日動火災海上保険、日本生命保険、みずほインベスターーズ証券、安田信託銀行  
△不動産▽ 青山メインランド、スターツ、ハウスマイト管理  
△出版・印刷・広告・放送▽ アクセス通信、セプテニー、東京リスマッチク、有線ブロードネットワークス、陽幸社  
△建設業▽ 旭化成ホームズ、信州ミサワホーム  
△情報サービス▽ アルゴ、伊藤忠テクノサイエンス、インテックソリューションパワー、コスマ・サイエンティフィック・システム、サービスウェア・コーポレーション、住商情報システム、ソフトウエアコントロール、ダイヤモンド富士ソフト、トランス・コスマス、日本コンピュータ・ダイナミクス、日本ユニシス・ソフトウェア、富士通テクノシステム、富士ゼロックス情報システム、ユニアデックス△その他サービス▽ アサヒサンクリーン、キャッツ、スタッフサービス、セコム、総合会計事務所、千葉西総合病院、テンプスタッフ、日立ビルシステム、富士通サポート&サービス、プロフェンオ、ライフランド  
△教育業▽ アビバコーポレーション、クラ・ゼミ、東京個別指導学院、日語進修学院、日能研、ノヴァ、廣池学園  
△公務・団体▽ 環境省、新潟県庁、川口市役所、川崎市教育委員会、神奈川県警察本部、千葉県警察本部、J A西印旛、電気事業連合会

# 面から就職活動をサポートします。

2	3	4	5	6	7
ト)					

会社説明会開催

(筆記試験・面接試験)

内(々)定

掌握・将来設計など)

社訪問・店舗見学など)

接)

タス の機会 セミナー セミナー アプセミナー 模擬テスト 室	学内企業セミナー マナー教室	就職ガイダンス	学内企業セミナー	(学内企業セミナー)	TOEIC団体試験
---	-------------------	---------	----------	------------	-----------

## 公務員課外授業 プログラム

公務員試験にポイントを  
絞った講義、演習、さらには  
模擬試験も実施しています。

### ●集中コース (主に1・2年生対象)

#### 開講期間

1週間の集中講義制(夏期・春期)  
夏期・9月上旬  
春期・3月下旬  
(もしくは4月上旬)

#### 開講科目

憲法・民法・経済学・行政法  
※それぞれの科目につき、1日3コマ実施

#### その他

夏期・春期の講義終了後に  
模擬試験を実施。  
受講費用3,000円の追加で、  
通年コースへの参加もできます。

### ●通年コース (主に3年生対象)

#### 開講期間

通年制(6月～翌年5月)  
※前期(6～9月)は講義中心、  
後期(11～5月)は問題演習中心。

#### 開講科目

憲法・民法・経済学・行政法  
※それぞれの科目につき、週1コマ実施

#### その他

集中コースで実施される  
教養科目(判断推理・数的推理)  
を含め、集中講義への参加も  
できます。

※教養試験対策講座「基礎学力強化」  
集中・通年の両コース共通で、教養試験  
(判断推理・数的推理)対策講座を通年  
で開講します。

## 面接試験対策

### ■マナー教室

社会人として活躍するために欠かせないマナーなどをしっかりと身につけます。  
就職活動にも役立つ内容です。

### ■模擬面接

面接の模擬試験(個人面接・集団面接)を行いながら、履歴書・自己PR・エントリーシートの上手な作成の仕方を身につけています。

## 筆記試験対策

### ■筆記試験対策講座

一般常識やSPIなどの筆記試験への対策として、問題演習や解説などを行い、自信をつけていきます。

### ■筆記試験模擬テスト

一般常識・基礎常識(国語・数学・英語・理科など)と社会常識(時事問題・マナーなど)や、SPI:能力検査(言語・非言語)と性格検査などの模擬テストを実施します。

### ■就職適性検査

自分の基礎的な能力や性格、興味ある仕事、職種別の適性などを知るきっかけとして役立てます。

### ■その他

TOEIC団体試験を実施します。  
就職活動において、重要な資格の一つ。スコアアップをめざし、対策講座を含めてパックアップします。

### ■キャリアアップセミナー

業界を研究する場です。  
企業人担当者によるパネルディスカッションや個別セミナーを開催します。

### ■学内企業セミナー

企業情報を得る場です。  
企業人事担当者と直接面談して、業界とその企業の理解を深めています。

### ● 就職支援活動予定表

各企業の採用スケジュールに先駆けて、さまざま

就職指導

就職ガイダンス

3年次の7月・9月・2月、  
及び4年生の4月に実施。  
それぞれの時期に合わせた  
就職活動の上手な進め方や  
注意点などを説明します。

## ■テーマ別ガイド

【就職活動の流れ】  
【業界・企業研究の進め方】  
【自己分析の進め方】  
各テーマごとにガイダンスを行います。

就職特別セミナー

「インターネットを活用した就職活動の現状と留意点」、「魅力あるエントリーシート・履歴書・自己PR文の書き方」などのテーマを、具体的な事例を交え指導していきます。

■ 進路相談

進路(就職・進学・他)の相談をはじめ、就職活動の進め方、留意点など、就職に関する質問・疑問にお答えします。

就職疑似體驗

## ■ インターンシップ

企業の業務を直接体験することにより、自己を正しく認識。仕事に取り組む態度を磨き、併せて就職活動を真摯に行なう心構えをつくり上げることを目標としています。事前の面接や研修を経て、参加目的を明確にしながら、初步的な業界知識やビジネスマナーを身に付けた上で、3年生の夏休み(8月～9月上旬)に実施しています。

業界・企業研究

## ■ 4年生による就職体験

内定を勝ち取った4年生のお話を聞きます。貴重な体験談や後輩へのアドバイスなど、密度の濃い内容です。

## ■卒業生との懇談会

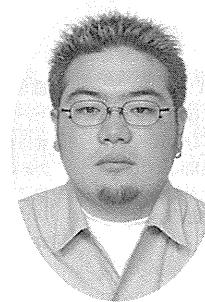
実社会で活躍している卒業生を招いてお話を聞きます。  
社会に出て感じていることや後輩へのアドバイスなど盛りだくさんです。

## 第三八回麗陵祭をとおして学んだこと

学友会麗陵祭実行委員会

委員長 藤山岳士

(国際経営学科三年)



第三八回麗陵祭は、平成一三年一一月の三・四・五日に開催されました。残念ながら全ての日程が快晴とはいかず、昨年に比べて来場者の数も減ってしまいましたが、九九〇三人と、約二万人に近い方々が来場されました。麗陵祭が終わって最初この数を

聞いた時に、昨年よりも少なくなつてしまつたなと感じました。しかし、よく思い返してみると、初日、雨が降るまでは、今まで委員として麗陵祭を見てきた中で一番来場者が多かつたように感じたのを覚えています。来場者数は天候に左右されるものの、麗陵祭の知名度が、年々、確実に上がってきているのを感じる事が出来ました。

第三八回麗陵祭は、平成一三年一一月の三・四・五日に開催されました。残念ながら全ての日程が快晴とはいかず、昨年に比べて来場者の数も減ってしまいましたが、九九〇三人と、約二万人に近い方々が来場されました。麗陵祭が終わって最初この数を

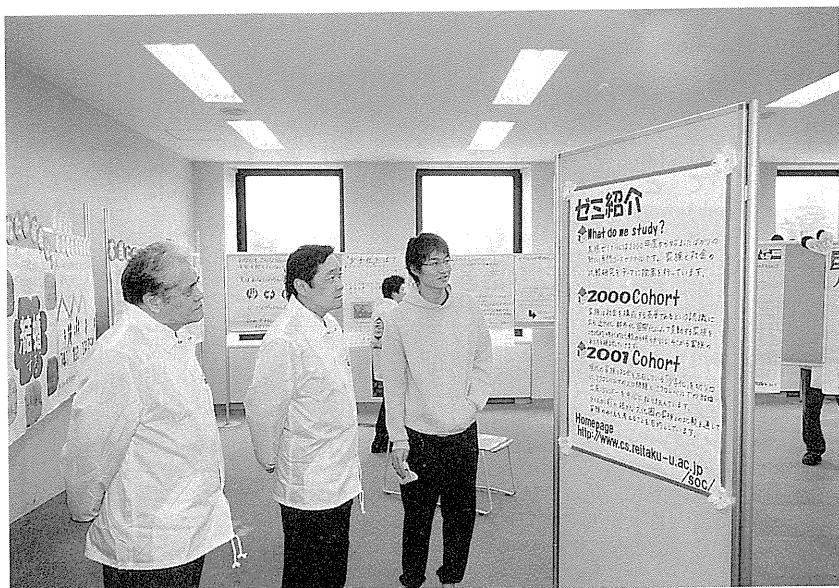
自分達がこの第三八回麗陵祭を無事終える事が出来たのは、来場の方々、参加団体の方々、各業者の方々、教職員の方々、麗陵祭に少しでも関わって頂いた方々、そして今まで三七代にもわたる先輩の方々の協力のお蔭です。この様に本当に様々な人達が関わる麗陵祭を準備するのに、私達は二月から活動してきました。二月から麗陵祭までの期間は、本

本当に学び、経験する事が数多くありました。



ブータンの民族衣装

私たち麗陵祭実行委員会は、本部、広報局、文化局、総務局、装飾局、企画局の六つの部署に分かれています。私は一年生から二年生の時まで活動していました。私は一年生から二年生のは裝飾局に属していました。そして、今回三年生になつて、委員長ということで本部に属して活動して



学長も副学長も見に来てくださいました

きました。委員長になって一番に感じた事は、装飾局から本部という変化よりも、むしろ、装飾局の事と本当にちょっとした自分の周りのことだけ考えていれば良かった立場から、全ての部署と麗陵祭の事全てを考えなければならないという役職についたことへの大きなプレッシャーでした。

一年生のときは麗陵祭の事をあまりよく知らないせいもあって、与えられた仕事をこなしてさえれば満足でき、終了時には感動するというものでした。そして、二年生になり、装飾局の副局長という役職に就きました。前期までは毎週月曜日の局会議に加えて、毎週水曜日のトップ会議にも参加することになりました。局全体の仕事、そして自分で仕事をつて局員に与えるということなど、トップの一人ということで、麗陵祭の事を一年生の時に比べて広い視野で捉える事が出来ました。この経験を通して、多少は人の上に立つということを学ぶ事が出来たと思います。

そして二年生になつて委員長という役職に就いたということは、必然的に広い視野で麗陵祭を見て、尚

且つ全体を把握しなければいけなくなつたという事でした。この二つは今まで色々な人達から耳にタコができる位聞いてきて、自分でも理解しているつもりです。しかし私にはそれ以上に大切にしたいと思つてきました事が麗陵祭実行委員会の委員長としてありました。

それは、局員一人一人のことを考え、局員一人一人が持つている麗陵祭への熱意を誰よりも感じて、それを誰よりも大切にする事。そして、局員以上に自分が考へ、熱意を持ち、動かなければ、自分以外の一三七人の委員達をまとめ、動かす事は難しいという事です。

「委員長が動いたらダメじゃないかな」と色々な人に言われましたが、私は一つのタイプが在つていると思います。昔の名将にも、上杉謙信のように自ら陣頭に立つて指揮をとるタイプと、武田信玄のように後ろに陣どつて指揮をとるタイプがありました。どちらが優れているのか私には良く分かりませんが、局員以上に動く事を大にしたいというのは、一、二年生の時に学んだ事かもしません。なぜなら、特に自分が一年生の時に、上の人がよく動いてくれ



未来の麗大生？



実行委員長の挨拶



サニーゲイツ



おいしいよ！食べてかない？



演武会（空手道部）

たり、上の人に助けてもらつた時などは、とても感動したからです。

しかしここで誤解して欲しくないのが、「動く」ということが必ずしも仕事量のことだけではなく、重要なのは、各部署ごとの仕事、もしくは自分に関わりのある仕事だけを知っていることではなくて、麗陵祭に関わるすべてのことを知っているということです。「動く」というよりも、どんな時にも「動ける」と言つたほうが適切なのかもしれません。まるで親みたいにあるべきだと思いました。親というのは、子のすることに全て口出しするわけではなく、子が迷つたり壁にぶち当たつたりした時に、手助けをしたり一緒に何かをしたりします。しかし、手を差し出すまで何も見ていないという訳ではなく、絶対にいつでも「動ける」ように、いろいろな形で必ず見守つていなければならぬということです。

そしてここで忘れてはいけないことは、その親にも親がいるという事です。委員長としての私にとっての親は、麗陵祭委員のOB・OGの方々や学生部

の方々で、本当に助けて頂きました。

ここには書ききれないぐらいの事を本当に学んで、考えて、悩んで、実感して、経験してきましたが、色々な意味で、麗陵祭には回避できたミスや、不十分な点がいくつもあります。麗陵祭が終了して思ったのですが、色々な意味で麗陵祭は未完成であると思う方がいいと思います。なぜなら完成されているということは、それ以上はないということだからです。それならいっそのこと、いつも未完成でいるほうが「これからどう発展するんだろう」という楽しみがあると私は思います。しかしそれは「失敗作」や「不良品」などの意味でなく、これから可能性にみちているというニュアンスが含まれています。「麗陵祭は未だ完成していません」といつた時、それは自らの欠点を知り、前に進んでいっているような、前向きな姿勢を感じられるからです。これから先も、麗陵祭は輝ける完成という陽の射す方へ向かって永久に前進していくと欲しいと、三八人目の委員長として、願いを込めづけたいと思います。

## 麗陵祭に「米百俵」を出展して

国際経済学部 平成一三年度 丸山康則ゼミ一同

平成一三年の五月七日、小泉首相が所信表明演説を次の言葉で締めくくった。「今の痛みに耐えて明日を良くしよう」という『米百俵の精神』こそ、改革を進めようとする今日の我々に必要ではないでしょうか。」

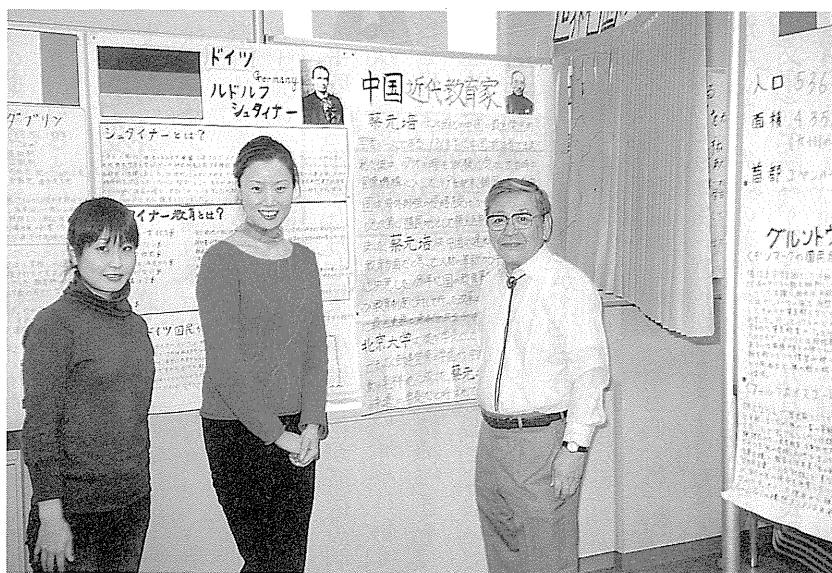
『米百俵』とはなにか？ その精神とは？

丸山ゼミは、このテーマに取り組んだ。

幸い、わが麗澤大学には「米百俵」の研究の第一人者である松本健一教授がおられる。早速お話をうかがった。先生の著作『われに万古の心あり』（筑摩文庫）を読み、夏休み中の九月初め、長岡を訪ねた。

『米百俵』とはなにか？ その精神とは？ 丸山ゼミは、このテーマに取り組んだ。幸い、わが麗澤大学には「米百俵」の研究の第一人者である松本健一教授がおられる。早速お話をうかがった。先生の著作『われに万古の心あり』（筑摩文庫）を読み、夏休み中の九月初め、長岡を訪ねた。

官軍代表と長岡藩代表河井継之助の談判の場所となつた小千谷の寺の一室で往時を偲び、長岡図書館に行って稻川館長から戊辰戦争と小林虎三郎の話を聴き、図書館所蔵の虎三郎の揮毫になる書をいくつか見せていただいた。翌日は台風の影響で風と雨の日となつたが、虎三郎が建てた国漢学校の跡地にある長岡市学校町（こんな町名は他には無いのではないか）に、県立長岡高等学校と阪之上小学校を訪ねた。長岡高校でも阪之上小学校でも、特別に一室が設けられ、米百俵や戊辰戦争、また長岡出身の先人たちを学ぶことの出来る「郷土を知る部屋」になっていた。



麗陵祭でのゼミ展示（2001年11月）

どこでも熱っぽく語られた。

帰りのバスは、台風のため高速道路が閉鎖され、帰校は大幅に遅れた。しかもそのバスの中のTVで、アメリカの貿易センタービルがテロによって崩壊する実況中継のニュース映像を見た。忘れられない劇的なゼミ旅行となつた。

さて『米百俵』の研究と発表準備をしていく中で、日本以外の多くの国にも、未来を見つめ教育に力を注いだ物語があるにちがいない、それを調べよう、ということになった。今わが大学には、一九の国から四七〇人ほどの留学生が来ている。留学生たちから、母国の優れた教育者の話を聞くことにした。国際交流センターが協力してくれた。

また、新聞がアイルランドのオマリー文部大臣の話を紹介していた。今から三〇年も前、厳しい財政のなかで高校までの義務教育を断行し、それが今日のアイルランド発展の基盤を作つたというのである。アイルランド大使館に資料とオマリーさんの写真をお願いした。こころよく引受けてくれた。

また、カンボジアで学校を建て続けている長岡出身の神父さんを知った。

こうして、展示発表となつた。お世話になつた方々に心から感謝する。多くの方の協力・支援があつたからこそ出来たことであつた。思えば、教育立国は、本学創立の学祖廣池千九郎先生の理念である。日々のニュースで、戦場となつてゐる貧しいアフガニスタンを見る。かの国にも、やがて、教育によつて立ち直る日の来ることを、希望をもつて祈りたい。

### 展示への感想

私たちの展示をご覧になつた方々に感想を書いていただきた。次にその中のいくつかを掲げます。

- ・米百俵の話は、前に少し聞いたことがあつたのですが、今日この展示を見て、改めてすごいと思いました。武士というものの精神はもっと学びたいと思います。

- ・小林虎三郎の「米百俵」の話は、旅行で長岡へ行つた時、すでに知つていたし、小泉総理の話にも出てよく知つてゐる。今回は、外国にも同じように「米百俵」の精神をもつた人たちがいたという話が紹介されていて、大変感動した。
- ・目からうろこが落ちました。
- ・ゼミの学生さんが、各国の人物の資料集めなど、



丸山ゼミのメンバー（平成13年度）

大変熱心にしていらっしゃるので、驚いています。お礼のご挨拶の掲示まで用意して説明されているに感心しました。小林虎三郎という人物の生きた意味も、良く表れていると思います。

・ビデオや資料を通じて、米百俵の精神をゆっくり見せていただきました。また、同じような教育に力を注いだ各国の偉人たちの紹介等、わかりやすい展示で大変良かったと思います。

・受付の人がていねいに説明してくれたので、長岡の米百俵の政策が良く分かった。今後の日本は、もつとこの政策の精神を学ぶべきだと思つた。

・教育は国の中でも一番の財産です。それぞれの国でそれを作るためにリーダーがあり、さまざまな政策を行ったことを良く理解することができます。有難うございました。親として最近、教育の大切さを実感しております。

## 英語劇を通じての出会い

国際経済学科三年 塩澤善弘

英語劇が無ければ、今の私も無い。そう言えるほど、私には英語劇を通じて学んだ事・出会いがたくさんあります。

一九九九年三月三〇日、桜の開花もまだ新鮮な頃、私は麗澤大学学生寮に入寮しました。他の人より二日遅れのため、前日の新入生歓迎コンパには参加出来ず、残念ながら私は知り合いが出来ておりませんでした。しかし、数日経つと、同じ階の寮生とも顔見知りになり、仲良くなつておりました。四月になつても寮コンパは続いていたため、私も何度か参加する機会に恵まれました。あるコンパの時、同じ階に住む上級生から英語劇グループの話が出ました。そ

のグループでも新入生歓迎パーティーが行われていると知り、そのパーティーに参加する事を約束しました。

数日後、上級生に連れられて、私は英語劇グループのパーティーが行われているマーウィン・トリキアン先生（英語劇グループの演出家）のお宅に伺いました。先生のお宅へは、大学を出て一分と経たない内に到着できます。先生のお宅へ入ると、玄関で先生が待つていらっしゃいました。トリキアン先生は一人一人に挨拶をされて、いよいよ私の番となつた時でした。先生は、「Where are you from?」と尋ねてこられましたが、私はてっきり、初めには名



前を聞かれるものだと思ふ、「My name is Shiozawa」と答えてしまいました。上級生が、「どう出身なの?」と通訳して下さったので、自分の間違いに気付くことが出来ました。恥ずかしい事に、私が大学に入つて初めての頃は、この位、英語が理解出来なかつたのです。旅行を別とすれば、私にとっては外国人との出会いや、英語で会話をするなんて事は、まったく初めての事でした。挨拶を済ませて部屋へ入ると、壁には過去の英語劇公演のパネルが飾つてありました。私はそのパネルから、驚きよりも、少々不気味な感覚に襲われました。

パーティーで様々な上級生と話したお陰か、上級生の優しさや雰囲気の良さに心地よさを覚え、私は英語劇グループに興味を持ち始めました。しかし、劇をやってみたいという気持ちは全くありませんでした。

英語劇グループのメンバーとして活動に参加しても、私はまだ本気で活動しようという気にはなれませんでした。なぜなら、私には演劇という未知なるものに対し、まだ抵抗感があつたからです。新入生に演技を教えるための練習劇でさえ、私は本気で演じる事が出来ず、ただ照れ臭いだけでした。

四月下旬、英語劇グループによる『活動見学会』が行われる事を知り、興味本位で観に行きました。『活動見学会』とは、新入生のために、英語劇グルー

プの大きな活動内容と、かつて上演された劇の一  
部を、実際に見せようというものでした。この時は、  
その前の年度に上演されたシェイクスピア作『ヘン  
リー五世 (HENRY V)』より、一場面が上演され  
ました。英語を聞き取れない私には劇中の台詞が理  
解出来ませんでしたが、パーティーで出会つた上級  
生の方々の変わり様に驚いてしました。グル  
ープの雰囲気の良さに好感を抱いたこともあり、私は  
英語劇グループに入つてみることにしました。

周りの同級生達が、まるで人が変わったかの様に演  
技するのを見て、「なぜそんなに変われるの?」と  
不思議でたまりませんでした。

六月から英語劇グループも本腰を入れて活動する



2001年11月の東京公演（渋谷）「ハムレット」の1シーン

事となりました。新人生を中心とする前期公演が行われるのです。この時の公演は、トリキアン先生の叔父、ギャビン・バントック先生（元麗澤大学教授であり、また英語劇グループの演出家も務められました）が、来日三十周年記念を兼ねて、私達のために特別に台本を書いて下さいました。この劇『シェイクスピアから愛を込めて(FROM SHAKESPEARE WITH LOVE)』は、シェイクスピア作品の登場人物が一堂に会して、シェイクスピアが作った新作を皆で演じようというものでした。私はその中でゲイの役でした。本気で演技が出来ず、ましてゲイでもないのにその役を演じることは、私にとって苦痛であり、何も楽しくないまま練習を続けていました。当然、演出を担当している上級生から怒られてしまい、私は氣落ちしていました。しかし、当時のグループの代表であった上級生が楽しく教えてくださった事で、私は劇の楽しさに気付いて行きました。ゲイの役を演じるには勇気が必要でしたが、最後には楽しく演じられてよかったです。

夏休みをはさんで九月中旬より、英語劇グループの活動は再開します。その年の後期公演は、シェイクスピア作『オセロ（OTHELLO）』でした。後期公演は、麗陵祭でのイベントとして公演するだけではなく、渋谷のクロスタワーホールでも公演します。

クロスタワーホールに行つた時の感動は、楽屋の良さでした。大学の中でいつも使っている活動場所は、単なる部屋で、それも畳を敷いた和室です。クロスタワーホールの楽屋を見た時に、本当のプロのような感覚を少しだけ味わいました。東京公演には私の友人もわざわざ観に来てくれて嬉しく思いました。英語劇の一周年間は、演技や道具の製作・準備、そして本番前の緊張感など、何もかもが新鮮でした。その思いとは別に、私はそこで英語劇グループを辞めようと思つていました。私は英語劇グループのメンバーとして今後も活動していく事に、今一つ馴染む事が出来ませんでした。

しかし、その思いを止めてくれたのが、私の高校

時代からの友人でした。彼は毎回公演を観に来てくれていて、そんな彼に、大学生活の喜びや不満を素直に話す事が出来ました。私が英語劇グループを辞めたいと思っていることを彼に告げると、彼は「辞める必要なんて何も無いじゃないか」と言いました。彼は「他の大学を見ても、君の所属しているグループのような所は無いし、僕の通つている大学にだって、そんな魅力的な団体は無い」と言ってくれました。私はそこで考え方直し、とりあえずもう少し続けてみてから、また考えようと思いました。今思うと、彼のこの言葉が無ければ、私はグループでの活動を続けてこなかつたでしょう。英語劇グループを通しての出会いも、彼なくしてはあり得なかつたでしょう。ここまで私の最初の一周年間を紹介させて頂きましたが、このあと私にとって最大の出会いともいえる出来事が待ち受けていたのです。

二〇〇〇年、二年生になつて解つた事ですが、下級生に教えることがこんなにも大変な事だとは思いもよませんでした。まるで一年生が悪魔のように



2001年11月の東京公演（渋谷）「ハムレット」のカーテンコール

見え、自分が一年生であった時のことを思うと、私は相当、手がかかる下級生で、上級生の方々にご迷惑をお掛けしたのでしょうか。一年生の時には本気で演じていなかつた練習劇も、今度は自分が教える番ならば、まず自分が出来ていなくてはと、上級生の辛さが身に染みて理解できました。

夏休みになると、麗澤高校ESSやバントック先生が演出されている明徳義塾高校国際部に、麗大英語劇のメンバーが手伝いとして駆り出されるのですが、私は「人数が足りなければ手伝いますよ」と、それ程乗り気でやるつもりはありませんでした。偶然にも、麗澤高校ESSを引き受けた上級生の都合が悪くなり、私が交代で行く事となりました。しかし、その偶然が私の人生を変えたと言つても過言ではない程の出来事となりました。ESSの顧問、森川嘉之先生との出会いでした。森川先生は英語劇グループの卒業生であり、実に私の二〇数年も前の上級生という事になります。

先生は英語劇グループを卒業してから、教師とし

て麗澤高校に赴任し、ESSの顧問となつた今、英語劇グループとの繋がりがある事に喜びを感じると私は話して下さり、私は凄い事だと思いました。それは、何年も前の上級生から現役メンバーである下級生へと、英語劇を通じての関わりがつながっていることに感動したからです。

麗澤高校ESSの手伝いの中で、私は大学生の下級生と高校生に対しての考え方の違いを感じました。その事によって、教える人ごとに練習の仕方を変えて、相手の個性を尊重する考え方を学びました。ESSの公演が終わった時に高校生達は涙を流して感動していました。そして高校生から「塩澤さん、有難うございました」と言われた時、私も涙が出そうになりました。高校生の真剣な行動に、私は教える事より教わる事の方が多かった様な気がします。手伝って良かったと心から思いました。

当時二年生であった私には、二年生が主となる後期公演、シェイクスピア作『夏の夜の夢（A MIDSUMMERNIGHT'S DREAM）』の練習は、ES

Sの公演が終わって間も無く始まつたために、少々苦しい出だしとなりました。私は四人の恋する若者達の一人として、物語を進めていく事となりました。二ヶ月にもわたる練習の中で、互いにうまく行かない事もありましたが、四人で乗り越える事が出来、同級生としての絆きずなが深まりました。

東京公演の際、本番直前の全員での発声練習も終わった後、私は客席の最上段に上がりました。そこから舞台を眺めると、大道具、衣装、舞台メイクや照明など、全ての担当者の気持ちが一つになつている事に感動しました。それはメンバー一人一人が、自分だけのためではなく、劇を成功させようと一致団結した形の表れなのだとと思いました。皆、誰かのためにやっている。そう思った私は、日頃から世話になつているメンバーだけでなく、家族、友人、そして観に来て下さる観客の皆様へも感謝を込めて演じようと思いました。そして『夏の夜の夢』は、想像を超えた反響を頂きました。

劇グループの代表となつた平成一三年度も、英語



東京公演終了後、片づけを終えて（2001年11月17日）

学科の所属団体から学友会の部活動へと、グループの位置づけが変わった事を始め、たくさんの問題や楽しい出来事が当然のように起こっていきました。しかし、私は様々な出来事が混ざりあって起きるからこそ、人生は楽しいのだと思います。

平成一三年度は新入生の入部人数も例年より少なく、そして後期公演に備えるためにも、一年生にとつて苦行でしかないギリシャ悲劇『アイオン (ION)』にあえて挑戦し、そして後期公演はシェイクスピアの四大悲劇の一つ『ハムレット (HAMLET)』に挑みました。私が思うに、平成一三年度は過去最高の苛酷な年となつたでしょう。

この三年間を振り返ってみると、初めの頃にはいい加減な気持ちで演劇をやっていた私も、公演を重ねるごとに、演劇は自分のためではなく誰かのために…ということ、仲間との団結意識、そして見て下さる方への感謝の気持ちなどが理解出来るようになります。英語劇グループは素晴らしい。

## 編集後記

◇かつて麗澤大学は小さな大学で、師弟関係は極めて緊密でした。今では学生が増え、その分匿名性も増して、そうした関係は期待できません。しかし、本号に寄せられた専門ゼミの紹介を読むと、その判断が誤っていたことに気づかされます。教員と少数の学生が互いに切磋琢磨する場がそこにあるからです。「麗澤」という言葉が、複数の澤が互いに潤しあいながら周囲の草木にも潤いを与えていく過程を意味するのなら、ゼミでの成果を、全学的に共有できる知的資産にしていきたいものです。

(K・H)

◆本号も△オピニオン▽・△特集▽・△麗大の今▽という三つの柱で編集しました。ご執筆くださいましたすべての皆さまに、心より御礼申上げます。◆△特集▽「麗澤大学の専門ゼミ」では、両学部から合計一二のゼミを取り上げ、担当教員・現役学生・卒業生の皆さまから玉稿を頂きました。◆本誌の編集委員会は左記のとおりです。戸田昌幸委員が望月正道委員と交代し、事務局に鈴木敦子広報課員が加わりました。◆今後もご愛読くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。(Y・S)

麗澤教育編集委員会（平成一三年度）

委員長・鈴木康之（外国語学部）

委員（外国语学部）・戸田昌幸、黒須里美

委員（国際経済学部）・中野千秋、堀内一史

事務局（広報課）・鳥瀬貞幸、米田隆彦、鈴木敦子

### 『麗澤教育』第八号

二〇〇一年四月一日 発行

編集 麗澤教育編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七一八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二一一一

電話 ○四一七一七三一三〇三〇

印刷所 昌美印刷株式会社

東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七

電話 ○三一三六九〇一三一九六